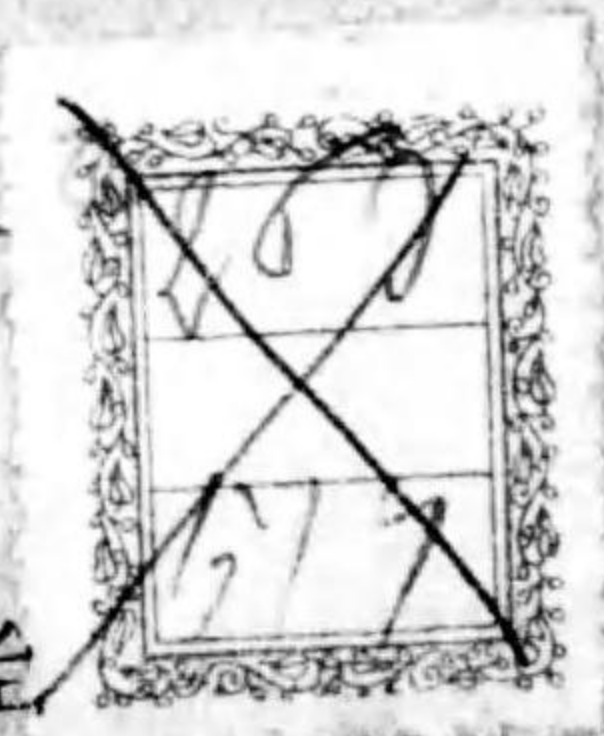


# 苦學十年



尾崎行雄 田川大吉 序  
松尾正直 著

國民書院 會社 資



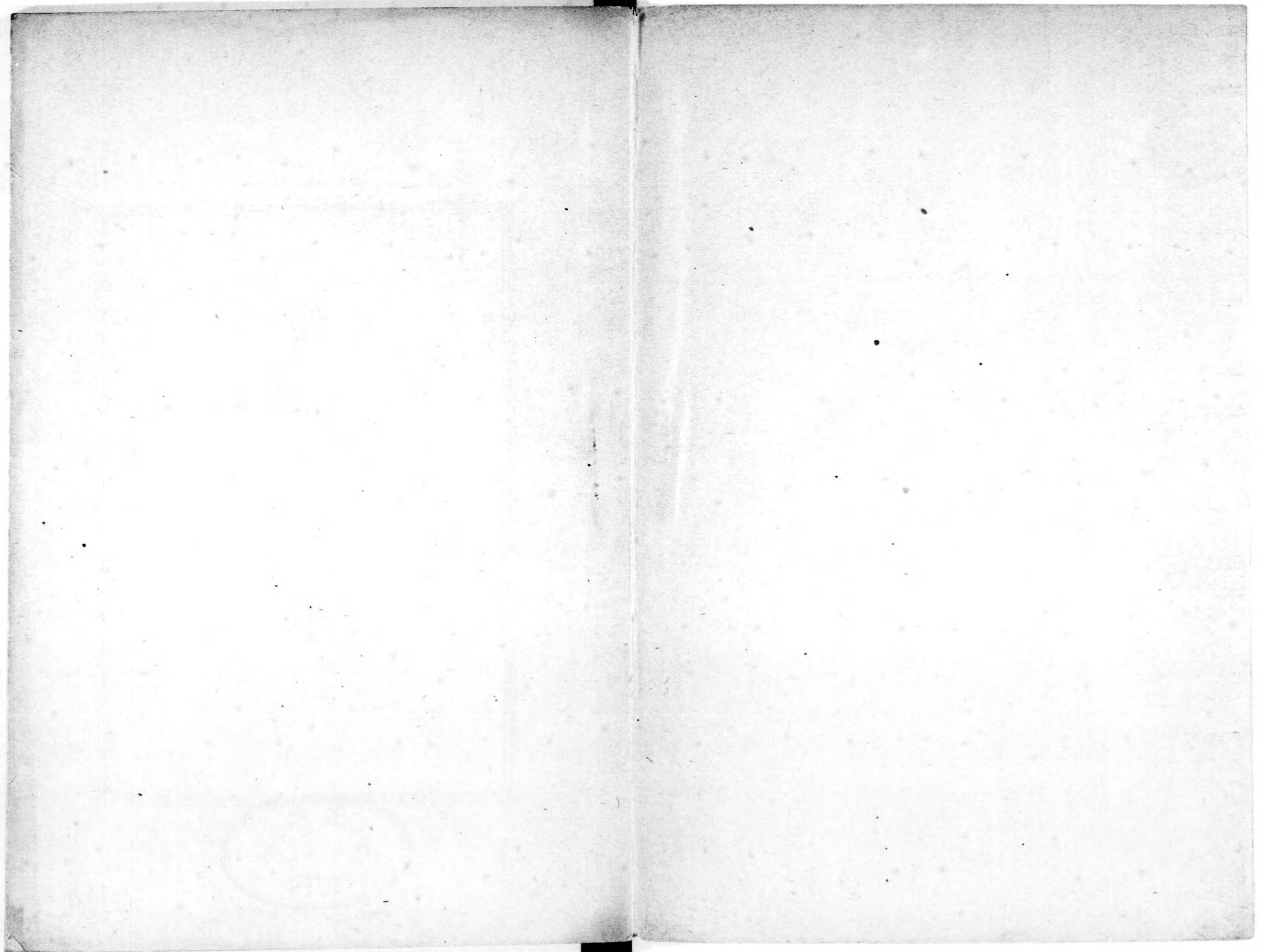
特



# 始

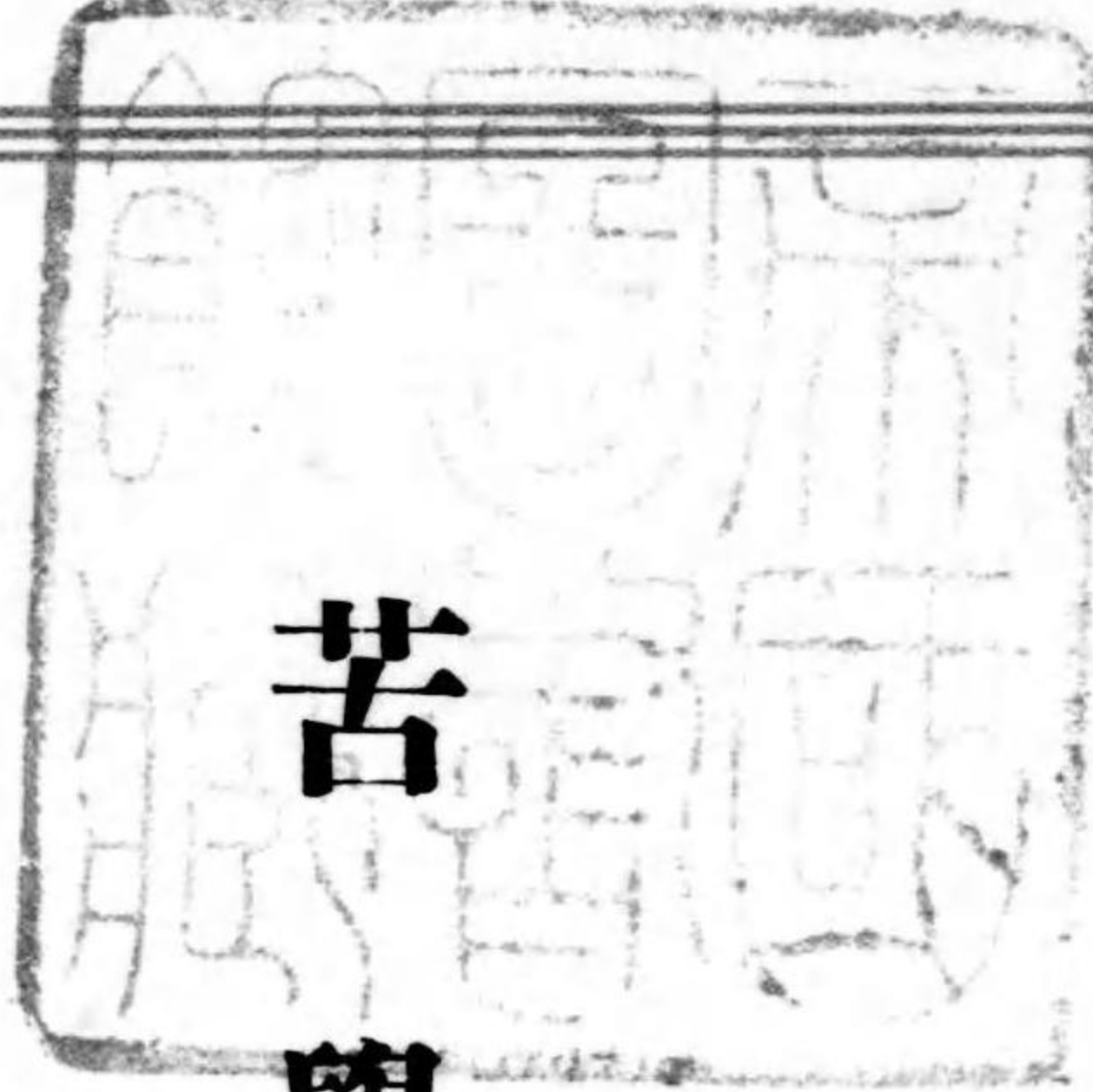








特102  
540



苦  
學  
十  
年

大正  
6. 2. 6  
内交



## 序

艱難爾を玉にすこ云ひ、精神一到何事か成らざらむこ云ふは、頗る陳套の語也。而も亦青年の心を刺戟して止まざるの斬新なる箴言たらずんばあらず。方今、遊惰の風一世に漲り、青年の意氣頗る衰ふるも、時に此の書の著者の如き、敢爲勇猛の士あり、苦學十年の實驗を提げ、これ等の箴言を具體化して示す。一讀奮然として起つもの必ずや尠なからざらむ。此の一篇の活教訓によりて天下の青年皆奮ひ起たば、國家の幸慶之に加ふるものあらむや。而して著



者の本懐亦ここに在る可き也。一言を序とす。

大正六年一月

尾崎行雄

序

天才の人に逢へば、怖ろしいやうな感じもするが、氣の毒のやうな感じもし、愉快な感じもするが、憐な感じもする。それに激まさるゝことは勿論で有るが、同時に將來は如何に成り行かるとか、氣遣はしい感じに撲たるとのが常で有る。

本書の著者松尾氏は、其の天才の一人として紹介された僕が最新の友にして、又最年少の友である。僕は前述べたやうな複雑な感じを以て、君を迎へた。今も尙、そのやうな感じを以て、君を眺めつゝ有る。但、君の成功を祈り、



健康を祈り、壽福を祈り、發達を祈る情の、親身も及ばぬ程切なるものゝ有ることは、こゝに申す迄も無い。

君と相看たのは、君の身上のためで有つた。其の身上のため、僕に、何か爲すべき途は無いかといふ御相談で有つた。これ程容易な相談も無いが、これ程困難な解決も無い他の先輩諸君は知らず、僕は毎々此の問題に悩まされ、而して何日も明快に應酬し得ずに居る。明快に應酬したいのであるが、明快に應酬し得ないから、それだけ悩まされるので有る。實際これ程困難な問題は少い。君の場合も亦其の一つだ。僕は何とも要領を得た答へを爲し得なかつた。

深く耻かしく、意氣地なく、感じた次第である。同時に悩ましく思ひあぐねた次第であつた。

君は、その僕の無爲を棄てず、不親切ともつぶやかず、引き續き來り訪はれつゝある一人で有る。この程は、急に本書を著したとて、序文を徵せらるゝに至つた。即ち其の才華の映發、文に想に、畧ぼ凝滞なき自由の手腕を認むること共に、更に窮厄に處して泰然たり、飽まで自家の運命を自家の獨り手に開拓せんとして、邁往倦まず、一難を経る毎に、反つて百倍し來る君の勇氣と志操を認むるに足る。是れ天才肌の人に取つては、寧ろ難しとする處、僕として



は殊に嘆稱せざるを得ない次第で有る。

苦學十年、其の名は其の實を示して居る。僕は未だ其の内容を知らないけれど、江湖多少の苦學の青年と共に、苦學の青年に同情する多少の先輩と共に、楽しんで之を讀みたいと期して居る。讀んで何を得るか、其の一つは、必ず苦學の青年を激ますの資で有らう。其の二は、苦學の青年に對する一世の同情を喚起する料で有らう。而して二者共に時代の要求で有る。天下の望みで有る。僕は著者と共に、必ず其のやうな結果を得たいと期して居る。

斯くて才子才を恃み、愚は愚を恃む。少年の才子は愚に

如かずと、古人の嘆じたやうな氣の毒の境地に、著者が過つても墮すること無く、益々其の才思を壯にし、其の筆硯を研き、文壇に、青年界に、進んで政界に、卓として一家を成し、優に貢献さるゝに至らんことは、僕の切望に堪へざる處である。

大正五年十二月十五日

辱知 田川大吉郎識



## 自序

十年と云へば一昔です。勿論永い月日に違ひありません。けれども此の私の十年は、眼の玉よりも大きな、眞に大粒の涙を、自分で自分の両手へ一ばいに受けて、夫れをまた一滴も残さず一氣に呑み乾したやうな、實に滑稽なる悲哀の十年であり、一昔でありました。また一生であつた。

笑つて下さるな。私は實際、此の本を誰れか、袖も振り合したことはない他人の一生とじて讀んで、馬鹿な奴ださつぶやくつもりだ。

十年と一昔と云ふべく餘りにあちこち流轉して居



り、空怖ろしいほど、思ひ出すごとに腋の下が濡れることをして居り、またそんなことまで白状せずとも宜いのにと言つて遣りたいほど露骨であり、自分から天才だなど言つたりして居るからです。

私がこゝまで書いて来た時電報が来た。私は樽拾ひ時代に生れて八つの今年まで病み通した末妹の壽々子が、キトクだからス、グカイレとあります。もう不可ないとは覺悟して居たのだが、これは死んだのだなど直覺しては、流石にまた哀傷の新たななるものがあつて、筆を持つに堪へない。薄命な妹の爲めに祈つてこれだけにします。

泣き虫であつた壽々ちゃん、兄さんは明日の朝一番早い汽車ポツポで歸るよ。せめて夫れまで待つて、呉れなくっちゃいやだ。壽々ちゃん好きを鯛トトの御飯をシヅチカで買つて行きますからね。きつとだよ。

大正五年十一月下旬脱稿せる日の午前二時半

著者 識



苦學十年目次

- 一、田川大吉郎氏夫人と二組のコーヒー茶碗……………一
- 二、父と生別れ十年……………九
- 三、私も人の子……………一七
- 四、幻滅の悲哀……………二四
- 五、病魔母と二人の妹と祖母の四人を倒してこども屋は破産……………三〇
- 六、あゝ死の聲『通夜物語』……………四〇
- 七、そののかされて寫真屋の見習……………四九
- 八、彩管に親しむ……………五二
- 九、新發明をして森村翁に認めらる……………五九
- 十、おゝ大日本國民中學講義録よ……………七〇



十一、八錢で名古屋から東京まで……………八二  
 十二、出世中毒(上の巻)……………八六  
 十三、出世中毒(中の巻)……………九七  
 十四、出世中毒(下の巻)……………一〇一  
 十五、濱名湖畔に病む……………一〇六  
 十六、東京の真中で野宿……………一一三  
 十七、新聞配達……………一二八  
 十八、夜泣きうどん屋と夕刊賣りと……………一三六  
 十九、にせ車夫とにせ癡兵……………一四四  
 二十、一生の恨み眉間の刀痕……………一五〇  
 二十一、文學に耽溺……………一五九  
 二十二、村井弦齋夫人と狂天法師……………一六五

二十三、湖を慕うて……………一六六  
 二十四、十八歳の新聞主筆……………一七一  
 二十五、近江八景の春……………一七七  
 二十六、愛し得ざる嘆き……………一八五  
 二十七、學問の逆轉……………一九一

—(終)—



# 苦學十年

松尾狂天著

## 一 田川大吉郎夫人と

### 二組のコーヒー茶碗

田川大吉郎氏夫人と二組のコーヒー茶碗、これが眞に赤裸々な、欺むかざるの記の、この『苦學十年』を私をして世間へ公開すべく決断せしめた、強烈な刺戟である。考へれば何と云ふ不思議な廻り合せでもあり、また妙な運命の進展に依つて人間社會へ出て行かうとはする、この『苦學十年』であることだらう。思へば大正五年十一月十七日のこの日は、朝からべつたりとくもつて寒か

二十、 學問の苦學 ..... 一五  
 二十六、 愛し君を愛する ..... 一六  
 二十五、 我々の苦學 ..... 一七  
 二十四、 十八歳の苦學 ..... 一八  
 二十三、 苦學の苦學 ..... 一九



つた。これが大隈内閣の總辭職をするまでは司法省の參政官であつたのだとは  
 どうしても思はれぬほど、打ち解けられた大吉郎氏が、私と連れ立つて小石川  
 小日向臺町の邸から江戸川の電車の乗り場まで歩き乍ら「雪模様ですなア、こ  
 れで東京はまだそんなことはないが、北の方は降つてゐるんですねえ」と云は  
 れた時の聲はいまだに耳に残つてゐる。

豫て知遇のある立憲青年主幹桐井謙堂氏の紹介で、其の月の初旬に大吉郎氏  
 に初対面した私は、それからちよいと／＼お邪魔したのであつた、恰かも氏は  
 書齋の新築中で、廣い邸内も玄關から奥までどの部屋もどの部屋も金文字脊皮  
 の洋書でせばめられてゐた、この日はじめて夫人に私はお目にかゝつた、玄  
 關のすぐとなりの、すつかり西洋風の十疊ほどの應接室で、藤椅子によりかゝ  
 つて明るい光線を受けた夫人の横顔は美しく、其の目は平和の色に輝やいた。  
 「英國から持つて歸つたのが多うございますの、大きな箱が二つも著きました

ものですから、何かと思ひましたら、夫れがすつかり本でございましてね」と  
 傍はらにうづ高く積まれた數百冊を、今更らのやうに見凝められたりした。其  
 の時御馳走になつたコーヒーの陶器だ。私は先づぎよつとせぬわけには行かな  
 かつた。實に其の小さい草花をつなぎ合せた金筋入りの模様焼きは、私が十三  
 の初夏から十四の秋が逝くまでの一箇年と云ふものを働いた名古屋市中村の  
 日本陶器會社の轉寫工場で出来た品物ではないか、現在私はこの模様を張り附  
 けて居た職工の一人ではなかつたか、世の中と云ふものは悲しいほど因縁の深  
 いものであるから、ことに依るとこの夫人と私との前へ置かれた二組のコーヒ  
 ー茶碗は、その當時汗水たらした結果の、私の製作の一つであるかも知れぬ、  
 私はおろかなきはみなことではあるけれど、過去十年の我れ乍ら慘憺たる苦學  
 生活の月日が、新なる哀傷のフィルムとなつて此のコーヒー茶碗をめぐつて胸  
 に映り、萬斛の思ひ出に堪へ難くなつて、おもはずも眼をしばたゝいたのであ



つた目敏い夫人は早くも氣付かれて、「何うか遊ばしましたか？」と訊かれた。「い、え、なか／＼あつさりした意装でございますね」と、ぶしつけなことだとは氣が付き乍らも、わきの方と茶碗とを七分三分に見て、一口飲んで私は涙をかくしたのであつた。

私の生れた家は三重縣伊勢の國の「坂は照る照る」の馬子唄で名高い鈴鹿の山また山の奥里である。代々暮しは相當に立つて来て、「松尾」と云ふ姓字は、俳聖松尾芭蕉翁の血統であるのだと云はれてゐた、さう云へば系圖に翁は無し、また國境一つ越して一里ほど離れてゐる伊賀の柘植には、有名な「ふるさとやへその緒寒き年の暮れ」と云ふ句碑もあり、翁の産湯にした水だと云ふ古井戸もある。全然別の松尾家と云ふのが私の乳母の家と隣り合つて立派に残つてゐるのであるから、正統では無いに違ひないが、愈々私の家が没落して明け渡すと云ふ時には、倉から澤山な俳句の丹尺が出たし、私の生れぬ先に亡くな

つて顔も知らないが祖父も發句を遣り、現に父も趣味を持つて居る。私も小學の三年生のときに、先生から寢覺めの床の繪を見せられて談しを聴かされた時に「鈴鹿は、七十丁の寢覺め哉」と詠んで、好いのか悪いのかは知らぬが、随分神童だなぞと云つて騒がれたのから見ると、尠しは其うした氣も無いこともないのだと云ひもする。

きのふまでは郡内で一二争そふ家に生れてお乳母日傘で實際に襖の風をも厭ふた身が、一朝日露戦争後の經濟亂調のあほりを喰つて、其の當時父が津市に株と米と兩方の仲買店を開いてゐたものであるから、一文も無しの身から一千万圓と云ふ巨利を博し當年の儲け大將として一世を驚倒せしめた彼の岡半對の闘將として大勢に何處までも逆行した結果は、一時にとつとばかり倒壊のやむなきに立ち至つたので、忽ちにして私は名古屋くんだりへ出て酒屋の小僧となつた。そして樽を拾つて歩いて小學校へ通はねばならぬことになつた。十一の



年から、去り去つた春夏秋冬の足掛け十年、十八才で滋賀縣大津市京津日報の主筆となり、十九の此の大正五年の七月、遠い頃からの望むところであつた、生國伊勢松坂の大正新聞株式會社の主筆として聘せられ、懸命の努力を續けること十一月までの五箇月、即ち約半歳、余暇をぬすんでは英語の獨習をしたものだ。ところが、端なくも株式會社成立記念の本社劇に對する方針上から社長との間に意見の衝突を來して、憤然席を蹴つて去り天下無録の悲しい快よさに蕭々たる客愁を追ふて上京するまでの足掛け十年は、眞に苦學の十年でもあり、また職業から職業で、それからそれへと流轉の十年でもあつた。

夫れにしても、私の愛讀をした、

『見渡せば、野の末山の果てまでも、花なき里ぞ無かりける。今を盛りに咲き揃ふ、色香めでたき其の花も、過ぎ來し方をたづぬれば、憂きことのみぞ多かりき。霜降る朝には葉を潰し、雨降る夜には枝を折り、枯れしともへも

眺められ、あつまり集ふうきごとの、つもり積もりしその中を、こらへしのびし甲斐ありて、めでたも春にめぐりあひ。』

と云ふ、矢野文雄氏の『經國美談』の絶唱に當て箴するやうな幸のあることが十年間一日だけでも酬はれたであつたらうか。この歌は尙四節の結びがあつてあまりはつきりとは覺へて居ないが、たしか、

『斯く咲き出づるぞたふとけれ。斯く咲きいづるぞめでたけれ。春の花こそたふとけれ、春の花こそめでたけれ。』

と云ふのであつたと思ふ。果して私は十年を苦學し、ありとあらゆる憂目を目たからと云つて、さうした、謂ふところ、たふといめでたい春の時代に入れたであらうか。思へば暗然として唯だ涙に頬が冷めなくなる計りである。

たゞ一つ、こゝに感謝しなければならぬことは、私は總ての周圍の人から愛せられることが多かつた。夫れは少しも遠慮なんかはしない、随分と負けん氣



の強いのが私の生れ付きの性分であつたけれど、名前が『正直』と云ふのであるから、名前負けだけはしないやうにしようと思つて何ごに對しても正直であるべく努力をした結果の賜物に外ならなかつた。自分乍ら古人の『正直は一生の寶』と云ふことを今更らのやうに痛切に感せずには居られなかつた。それであるのにどうだらう、私は斯う云ふに先立つて既に不正直であつたことが一つあるではないか。私は都新聞社へ行かれるのだと云ふ大吉郎氏と一緒に、夫人に別れ辭してから、殊に其の感を深くして。これまでの潔白であつた十九年の生ひ立ちに、拭ふことの出来ない一つの汚點を印した。と思ひ至つては實に矢も楯も堪まらなくなつた。不正直であつたと云ふのは他でもない、夫人から『何うか遊ばしました?』と尋ねられた時に私は直ぐに何故コーヒー茶碗に對して思ひ起した過去を、よしや斷片的になりとも素直に打ち開けることが出来なしたのであらう。私は尠くとも街つてゐたのだ、今は兎に角に。浪人であるに

せよ職工時代よりは立派であると思つてゐたから、我知らず不正直でないことを得なかつたのである。松尾正直が不正直であれば既に正直と云ふ人間は無い譯である。私は自己を没くしてまでも、一職工時代と尠しの軒軽もない、所謂新聞記者あがりによりに自負したのであらうか。哀れ何と云ふ悲しい滑稽であることだらう。私は何處までも松尾正直であらねばならぬ。不正直であつてはならぬ。

さらば、願はくば狂夫松尾正直をして、田川大吉郎氏夫人と二組のコーヒー茶碗の前に危ふくも墮落の第一歩に踏み外した私をして、一種の罪亡ぼしとも名付けたい気分、潰論萬丈の『苦學十年』を最も正直に告白するところあらしめよ。

## 二 父と生別れ十年



十年と云へば口でこそ十年であるけれど、月にしても新月が盆のやうになり其の圓い月の痛ましく缺けてゆくことが百二十度も行はれるのである。況してや日にすれば三千六百數十と云ふ、一昔にしても余りに數多い烏兔のめぐりであるものを。けれども通つて来て見れば、道は迂余し曲折しては居るが、十春秋十夏冬また遂に夢である。斯うしてこの先も十年また十年と冷めたい夢はつづいて、いつしか髪の毛が富士の禿麗を誇りそのまゝ老ひ了るのではあるまいかと思へば、これほどあはたしくも淋しいことがまたとあらうか。よしや塞翁が馬を上手に乗りこなしても、如何ほどの出世と云ふものをして見たところで、到底邯鄲の夢劇中の役者の境涯を脱け去ることの出来ぬのは、儂ない人間の定命と云ふものがあきらかに證して余りある。しかし人間の一生も儂なければ儂ないだけの興趣があり、邯鄲の夢劇は邯鄲の夢劇だけに夫れ相當の妙味がなければならぬ、されば儂ない邯鄲の夢には違ひないが、また幸福な人間は幸

福に違ひなく、不幸な人間はどこまでも不幸な人間に違ひない。そこに至つて私は、まあ何と云ふ薄運な男であつたことだらう、私は幼なくして親に縁がうすかつた。夫れも、まだ死に別れたのなら、自分勝手の愚痴のやうではあるがまた幾分自から慰さぬ、あきらめもしよう。私はまだいさげない十の年の初秋の夜先づ父と實に十年の生別れをしければならなかつた。

夫れは忘れもせぬ激しい雨風の晩であつた。今から思へば二百二十日前後のことであらう、尤も宵の口は明るい月夜であつたのであるが、不圖眼を覺まして見ると、大變な暴風で大分夜が更けてゐるのに父が何處かへ出掛けるらしく玄關の方へ靴などが持ち出してあり、祖母も母も起きてゐて、女中が家の中をがた／＼と走り廻つてゐる。やがて仕度が出来たと見えて、下男の徳と云ふのに靴を油紙に包んで持たせ、父はうつむいて母の手にあつた帳面を調べてゐるのが、むし暑くて寢間の襖も何の部屋の障子も皆明け放してあるので、宜く私



に見える。父は始終留守勝ちであつたから、さうして出て行くのも決して珍らしくは無いのであるが、その夜は何う云ふものか、皆の者の顔に不安の色のあるのが、幼な心の私の目にもあり／＼と讀めた。そしてびゅう／＼と鳴る戸の外風の音が妙に恐ろしくなつて、我れ知らず『父うさあんと』と聲限りに呼んだ。すると父は何と思つたか、すか／＼と座敷へ上つて来て、直きに歸つて来るからおとなしくして待つてゐるんだ、と云ふ意味のことを云つて、私の頭を二三度撫で、凝つと顔を見てから出て行つた。其の父の眼の底に涙があると見たのは私の誤まりであつたらうか、しかしこれが十年の生別れとならうとは、神でない身の少しも知らなかつた。あとになつて私には了解出来たことであるが、其の夜の暴風が松尾家の致命傷であつたのだ。父は下男を連れて豪雨の中を車が無いので一里半と云ふもの奈良の大佛と夫婦になつた地藏尊のあるので世間の人が能く知つてゐる、關町まで歩き、其處から車で龜山まで飛ばし、龜

山から同驛仕立ての午後十時何分と云ふ終列車で津へ行つて、動しても翌日の米の狂騰に對して手を廻さうとしたのであつた。けれども遂に萬事は休して、夫れから一月になるかならない間に、悉くを他人の手に渡さんければならぬ破目に突き詰めたのである。

殊にいまだに思ひ出すごとに、私の血を熱くするのは、家財を差し押へに来た債権者と執達吏の顔である。暴風の夜から三日目の午後三時頃のことであつた。私は學校から戻つた許りで、お茶受けを祖母から貰つてたべて居ると、津から父と鑛山事業を共同で遺つてゐた男と二三人の人が來た。其の男は始終私や妹に繪本や何かのお土産を持つて來て呉れる好きな叔父さんであつた。それで、例日のやうに『叔父さんいらつしやい』と云ふと、いつに無く恐ろしい顔をして黙つてゐる。すると父が留守なので代つてお相手をしてゐた母が彼方へ行つて居れと云ふ。暫らくすると、其の男は母に何の部屋も開けさせて、床の



掛圖から置物から、何から何まですつかり連れの男に小さな紙片れを張らして歩いた。其の上三棟の倉から離れから、みな靴のまゝで入り込んで同じく紙を長持や何かに張つた。夫れが済むと、亦母を前へ置いて大きな聲で何か命令をして、いつもは泊つて行くのに、此の日に限つて直ぐ歸つて仕舞つた。夫れは鑛山の方に缺損があつて、父の拂ふ可き金を其の男が立て替へた形になつて參萬圓とかの證文が入れてあつた。ところが父が定期で再び盛り返すことの不可能な痛手を受けたことを知つて、恰度證書の期限も來てゐたので、非常手段を執つたのである。と云ふのであるが、實際は、鑛山は尠しも損なんかはして居なかつたので、つまり其の男任せにした結果は、さうした一芝居を打たれたのであるとも云ふが、其の眞偽はこゝで無用な穿鑿として、兎も角弱り目に祟り目で斯んな事件が幾つも沸いて出た。私はしみじみ世間と云ふものは恐ろしいものだ、と思はずにはゐられなかつた。一時は所謂借りはみな濟まして、氣丈

な母は、だまつてゐたけれども「着物が無い」と云つて泣いて居た私や妹も其の年の天長節には、また自由に着て行くことが出来、「なが生きをするぞ、辛いことばかりや」と云つて嘆いてた祖母もほつと一息ついたのであつたが、來なくてもいい、悲しい十二月の十日は遂に來て、父は暴風雨の夜以來一度も歸らないのに、母との間には何時の暇にか相談が出来たものか、いよ／＼永年住み馴れた廣い屋敷を明け渡して、家族全部は名古屋へ引き移ることになつた。「米傳もとう／＼あかんげな」と村内の人々は一様にはろりとして呉れた。「米傳」と云ふのは、私が三つ四つのころまでは造酒業をしてゐたのであるが、其の後は唯だ遊んでゐて、年供米が山と這入つて來る、そして父が傳吉と云ふところから出た呼び名であつた。「正さま、名古屋へ御着きやつたら、すぐに手紙お呉れやすや」と、私が小學に這入る時に暇を取つて、伊賀の柘植へ嫁入をしてゐた、乳母のおしんも、



手傳ひに来て呉れて、私を抱き締めて泣いた。私は其の當時津へ出て中學へ通つてゐた兄が二人あり、三男であるが、生れた時母が永らく病んで、私だけが乳母の乳で育つたのである、父と二人の兄は留守で、年寄つた祖母と、今年八つになつてゐる一番下の妹を腹へ入れた母と、夫れから私と二人の妹と弟一人に女中一人だけの七人連れ、ガラ明きに明いてゐた二等車へ買ひ切りのやうに乗り込んで、懐かしい山川にさらばと幼ない乍らも心の中で云つた私は何として涙なきを得よう。乳母や、永年居た下男女中は窓の外で泣く、空もまたうら寒くばさくとみぞれるのであつた。走れよ、走れよ、列車が中京に着いたその日から私の『苦學十年』のページはひもごかれるのである。また中等車にも十年の別離さした日であつた。そして乳母にも十年、そして間もなく生みの母親とも六年と云ふ年月の生別かれをしなければならなかつたとは、何處まで灰色の運命の手に、殘忍なもてあそばれやうをした私の十年と云ふ月日であ

り、何と云ふ悲しい前世からの約束であつたことではあらう。

### 三 私 も 人 の 子

油繪のやうな明媚の連なること二里余、私が七十丁の寢覺めだと云つた鈴鹿川畔の、華やかであつた松尾家の最後の幕は斯くして閉ぢられたが、閉ぢるに閉ぢられぬのは、乾坤一擲の戦ひに敗れた、山のやうな尻である。それが爲めに子としては聞くも情ない訴訟沙汰さへも二回まで起きて、父は家が壊滅し去つてからも、恰度一箇年と云ふものは、弔すべき古戰場津市に居通しで、あはたいしい奔走を続けなければならなかつた。實に弱肉強食の世間は、よしや逆さにして振られるとも、もう鼻血も出なくなつた父を、飽くまで苦しめねば止まなかつた、けれども裁判の結果は、根が空中の樓閣を壊したり立てたりしてゐるやうな果ての債務と云ふので、破産の宣告だけは免れた。せめてものこ



いろなぐさめであつた。

父はさうして苦しむ。一方名古屋へ一先づ落付いたとは云ふものゝ、先立つものは金で、祖母と母も私も妹や弟もまた貧と馴れぬ借家住ひの狭隘に一通りや二通りでなく苦しんだ。じり／＼とろそふくの火が燃え盡くすやうにその年も押し詰まつてからのことであつた。祖母のへそくり金と母のお小遣ひの残りを、夫れに私達兄弟四人の貯金を合すと一寸千圓ほど出来たので、夫れを資本に、造酒をしてゐたので祖母や母が酒にすこしなり経験があるところから、酒と醤油や味噌の小賣りを始めることになつた。そして借りた家の表の間を土間に直すのや、品物や徳利の仕入れやいろんなものゝ買入れに手間取つて愈々開業の賣り出しをしたのは忘れもせぬ正月の四日であつた。

さて商賣をするとなると、第一に人が要る。祖母は得意廻りをするものを一人使はなければ、と云つたが、いさぎよくもみづから働かうと覺悟した母が、

たとへ父は留守でも男の子があるのであるから、他人を入れずに氣張らう、と國から連れて來たつた一人の女中も暇を遣つて仕舞つて意氣込みを見せたので、昨日までは御隠居様でお寺参りを何よりの仕事にしてゐた祖母が店番をすることになり、臺所の水仕事は母が引受け、得意廻りの役は私に振り當てられて仕舞つた。もつとも、津の中學に居た二人の兄を退學させて、と云ふ手紙での相談も父母の間に交されたのであつたが、もう暫らくを夫れは如何にも惜しいと云ふので、遂に私に白羽の矢が立つたのである。寄る年波をかへつて、忙しいない名古屋までも流れ出て小賣り店番、奥様々と云はれた身が、せまつくるしい臺所に、併も身重で洗ひ物。祖母も母もさぞ辛くはあり、お嬢さまお坊つちやま育ちを急に木綿着物に五厘の飴ん棒をお茶受けとして辛棒しなければならなかつた、がんせのない妹や弟も福が薄かつたには違ひないが、夫れよりも、もつと／＼辛く福が薄かつたのは私である。思ひ出せば、開店の日は



正月にはめづらしく好い天氣で、前日から約束して置いた、廣告屋が、たつた一人ではあつたが、真紅な唐縮緬の被布に金銀紙の長い烏帽子を冠つて、大きな太鼓の横のところに、また一つ金色に光つた小太鼓の引つ付いたのを、胸へ懸けて、ドンチャドンチャと鳴らし乍ら附近の町々を歩いた。私は其の後にぞろ／＼隨いて歩きたい年頃で居て、車を輓いて御用を聽いて歩かなければならなかつたとは、何と云ふみぢめさであつたらう。

私は學校へ行き度かつた。同じ年頃の少年が、冬休みを終つて元氣好く學校へ行く後ろ姿を見付けては、しみ／＼羨やましくなつて『氣を付けやがれ、ぼんやり小僧奴つ』と前から來た車夫に叱鳴られるまで、車輓く手を休めて、行ずむのが多かつたのもそのことである。さうしては家へ歸ると、注文されて來たのもあと廻しにして置いて『學校へ遣つて下さい』と母の前に涙ぐむのが常であつた。輓き馴れないものが車を輓くと、よく自分の車で曲り角なん

ごで足を輓くことがある。私はたゞさへ霜痛けのところを、幾度滑したことも知れない。けれども『雪の日やあれも人の子樽拾ひ』さうして樽を拾つて歩いて、も矢張り私も人の子であつたのだ。やうやく思ひが届いて西區下廣井學校へ通へるやうになつたのは、さしもに寒さを極めた其の年も、桃が咲くまでに暖かくなつた四月の初旬であつた。『永い間學校を休ませて可愛相でした、母さんもお前は一番成績が能いのだし、たとへ病氣でも休ましたくはない。況してお前がどれだけ行きたがつてゐるかは、母さんにはちやんと判つてましたのだけど、夫れかと云つて誰れも代りをする者はないし……』といよ／＼明日からは學校へ遣つて上げると母から言ひ聞かされた時には、私は胸に込みあげる嬉しさと、思ひ出す是れまでのつらさの悲しさに、ほろ／＼と涙をこぼして聲もなく泣くばかりであつた。

『それだから、お前が學校のの字でも言ひ出すと、お黙りなさい、とわざと



こわい顔をして勵ましてゐたのです、ゆるしてお呉れ」と云ふ産後の床にある母も泣くばかりである。それは、一番上の兄がやうやく苦しい中を中學だけ出ることが出来たので、名古屋へ来て、私のしてゐた仕事の大半をして呉れることになつた。私は朝のうち近所の得意だけ御用を聴いて来て置いて、一年生として新に通ふことになつた妹の手を引いて、學校へ行く暇が出来たのである。

學校の方では、三年の三學期をすつかり休んでゐるのであるから、轉校には本來なれば進級させることは出来ないのであるが、成績を見ると、三箇年とも非常に好いやうであるから、特別の取扱ひをして上げる、と云つて四學年へ皆と同じやうに入れて貰へた。其の時の私の喜び、さう云ふ先生の顔が神様ぢやないかと思はれた。私は故郷の方では、すうと首席で通してゐたのである。一學期間もまる休みさしたのではあつたけれど、幸ひ少しも負けずに皆と共に

前へ進むことが出来た。そして新參の身で一學期の級長に推された。殊に私は一年生の時から圖書と作文が得意で、轉校してからも先生から「松尾は天才だ皆も負けないやうにしなければなりません」などと、面恥ゆい限りのことを云はれるのであつた。噫私には此の時代からして既に、後年に至つて一管の筆を命として諸國を放浪流轉しなければならぬ悲しい運命の芽生えがあつたのである。其の結果は極端に級中の一部のもの、羨望の焦點に立つとともに、一方妬みの的とならなければならなかつた。「車を輓いてる級長」斯んなことを云つて學校のもどりなど能くいぢめつけられたものである。私の前に級長をしてゐた子の家は私の店の御得意であつたが、一日何の理由も無しに今後一さい要らぬと斷はられたのも其の時分のことである。私は子供心にも無念だと思はぬわけにはゆかなかつた。「何んだ、元の家なら、級中すつくり合しても、僕んとこの十分の一も無いんぢやないか」一人ばつちの時には自分と自分にこんな益もな



いことを云つたりしたのも、果敢ない反抗の一つである。最も私の辛かつたのは、伊勢と名古屋とはまるきり言葉遣ひが違ふ。夫れを放課時間になると皆んなに口真似されることであつた。その内にも月日はどん／＼流れて、間もなく私が小學生生活の最後となつた四學年十一の年の暑中休暇は來たのである。

#### 四 幻滅の悲哀

天才だと羨やまれ、くるま轆きだと卑すまれ乍らも私は學校で一字々々を覚えていつたが、一方店の方は兄が一生懸命に働らき、私も學校から歸ると早々用具を放り出して毎日手傳ふたが一日は一日として損をする許りであつた。酒には手馴れないのでひが這入る、醤油には賣れて行かぬのでじやみが出る、そして、第一得意が随分努めたのであるが少しも殖えない。或る朝なぞは起きて見ると、夜のうちに酒の詰本が抜けて仕舞つて、四斗樽に一抔あつたのが空に

なつてゐた。一度に二十何圓と損になる。益々左り前になつて行くのであつた他の兒童は海へ行つたり山へ登つたりするこの夏休みは、私にとつて、自分が創めたのであるから、我が命にも替へ難いとしてゐた酒の小賣店を、資金盡きてとら／＼閉めなければならぬ悲劇のあつた、忘れ得ざるところの恨めしい夏休みなのである。自分が子を持つて見はじめた眞の親の恩を知ると云ふ。私は始めて自分の商賣を云ふものに失敗して、今更らのやうに、津に於ける父の敗軍を人知れず弔るのであつた。同時に先には我が家と云ふものを忽然として根こそぎ失ひ、今また、たとへ半歳のことにしても懸命に守り立てた、兎に角に一個の我が店と云ふもの、燈火の消えるやうに亡ぶのも眼前にしては、私は云ひ難い幻滅の悲哀に打たれたのである。

閉店してから清算して見ると、結局二百圓程しか残らない。祖母と母と私と妹弟三人の六人、そこへ末の妹が生れ兄が來て八人家内、其の八つの口も食



べたであらうし、借家賃も要つたが、何と云つて呆れ返らうとも、私と兄とはさ  
 んぐ、苦しんで八百余圓の大損を半歳余りの間にしたのである。あゝ二百圓、  
 是の端した金で是れから先永く八人が生きて行かなければならぬかと考へては  
 私も兄も、祖母も母も慄然として顔を見合すばかりであつた。そこで十一とは  
 云へもうすつかりものごゝろの付いてゐた私は、斯うしてゐては、死を待つ許  
 りであるので、力を落して居る兄と互ひに慰さめ合ひ乍ら相談した結果は、夫  
 れでは故郷から薪炭を安く買ひ出して来て賣れば、大きな儲かりやうもないか  
 はりに、また損をすることもあるまい、と云ふので兄が注文して来て今度は炭  
 薪商をすることになつた、ところが兼ねて覺悟はしてかゝつたことではあるが  
 損もしないが、余りと云へば利益がない、いよくせつば詰まつて来たので、  
 これでは不可ない、この上は薪炭は祖母に留守を頼んで買ひ手が来れば賣ると  
 云ふだけに止め、母と兄と私と三人で何かなり稼がうとはこれも、私が血を吐

く思ひで學校をあきらめて、母と兄との前に出した考へであつた。流石の氣丈  
 な母もこの時は、恰度産後の疲れでがっかりして居る時で、其の上の稼ぎと云  
 ふことは、何にしても難儀であることはよくわかつてゐたのであるが、脊に腹  
 は變へられなかつた。何と云ふ悲惨なことであらう、三人は夫れく職業を求  
 める可く市街をうろつくことになつた。其の夜親子は御飯を咽喉へつまらせて  
 泣いたのである。夫れから二三日の後、米屋町と云ふ忘れることの出来ない定  
 期米の市場がある町を、地場と云つて空米ばかりをして居る無頼漢連を客に餅  
 菓子を函に入れて賣つて歩く一人の女の姿を見るやうになつた。私の母なので  
 ある。次ぎに兄は兎も角中學だけは出て居るので、銀行員として勤め先を見付  
 けは見付けたが、身元保証金がないので、見すく好い口を遁がし、或る運送  
 店の帳場へ這入つた。私は廣小路へ果物の夜店を出すことになつた。一番最初  
 は桃であつた、ところが桃には悉く生毛のやうなものが生へてゐて、自分乍ら



氣味悪いと思つてゐたので、朝青物市場から石油箱に這入つた奴を仕入れて來ると、先づ夫れを蕙の上くすつかり出して、暇に明してブラシの小さいので其の毛を一々磨き取ることを思ひ付いた。すると夫れをしないまでは店をはじめてからの二三日は極めて情ない賣り上げ高であつたのが、急にばたんと賣れ出して、毎日のやうに賣り果して歸るやうになり、夫れに勢付いて、幾箱も仕入れ來ては一晩に賣り盡して、多い時なぞ一夜に二圓も儲かり、一日動くも一圓以上の純益はあつた。一方母の商賣もなか／＼當つて、これも一日五十錢以上の利がある。兄は兄で月給を二十圓取る。其處へ九月からは津に居た父がいろいろ費用が要るので、續かなくなり、私の直ぐ上の兄も中學を斷念して名古屋へ出て來て、森村會社の事務員になつた。そして食べるだけ以上は貰つて來るやうになつた。血眼になつてゐた私も、やうやくほつとすることだけは出來るやうになつたのであつた。『稼ぐに追ひ付く貧乏なし』の權威をしみ／＼悟つたの

である。其の間にあつて私は西瓜の切り賣りに、梨の氷冷やしに、冷やし飴にと何れも相當の成功を収めた。そして暇さへあればその春買った小學校の教科書に入學科と云ふ詳解書を引き照らしては色讀するのであつた。其のころにはもうはじめ『桃を買つてらつしやい、桃はいかゞ』と呼び立てるのに苦しんだ賣り聲を立てなくても、每晚出る場所を替へないでゐたものであるから、誰れ云ふとなく『こども屋』と云ふ矛盾した、それでゐて何處となく眞理のある屋號が付いて、なか／＼よく繁昌した。

學校友達に見付けられても顔を赤くしなくなつた。何か一つでも買つて呉れば、お客さんとしてあがめて平氣である。『何んだ、元の家なら級中すつくり合しても、僕んとこの十分の一も無いんぢやないか』と反抗した三四月前の聲は、誰れが云つたと云はんばかりであつた。馬鹿になつたのか、賢くなつたのか、世馴れたのだと云へば夫れにも違ひない。何にしても大きくなる盛りの



少年としては、まことに、しいたげられたゆゑの、また自我の幻滅の悲哀の一  
つであることは争へぬ。

## 五 病魔母と二人の妹と祖母の四 人を倒してごども屋は破産

十一才の實業家はかうして「ごども屋」の主人公として己が家の没落の一週  
年と云ふ可き新秋を迎へた。もう單純な教科書の色讀ぐらいに満足出來なくな  
つて來た私は、いろ／＼の雑誌を漁るやうになり、また講談本などに長夜を徹  
するやうなことが度々あつた。其の爲めに費やす金が「ごども屋」にとつては  
甚だ尠少とは云へぬ。其處へ冷やし飴の時期も去りかけて來て、何か次ぎの商  
賣を發見せねばならなくなつた。私は本が讀みたさと、夫れから一つは燈火親  
しむの時に乗する一種の小さい風雲氣とに驅られて、家の生活費に當てた外に

利益の幾分を溜めたのが三十圓近くあつたので、夫れをもとでにして古本屋を  
はじめた。さあちつとも賣れはしない。唯だ自分が本が讀める計りである。思  
へで此の古本屋は自分の全財産を投げ出して、本を買つて讀んだと云ふに外な  
らなかつたのである。

さしもよく流行つた「ごども屋」が、主人公が自分の好いやうな方面に轉じ  
た爲め、何商賣に依らず、お客本位でなければならぬ筈のものだから、自然の  
成行きとしてうまく行かう譯はなく、斯くして一頓座を來して居る時に、家の  
方は何うなつたであらう。實に腹立たしいほど、またもやの不幸が相接いだの  
であつた。先づ母が、産後の身体を無理使ひした爲めに肋膜炎を引き起して、ど  
つと病の床に就いて仕舞つた。續いてどうも肥立ちが面白くなかつた生れて半  
歳になるかならぬの末の妹が氣管支加答兒に患つて苦しむ。夫んなことで、  
私は夜店を出すのも休み勝ちにならずには居られなかつた、夫れがまた「ごど



も屋』の寂れる一原因でもあつたのである。

母の病氣が素人の目に見え出した日のことを未だに私は、まざりと忘れぬのである。廣小路の柳が一ひら二ひら散り初めるころであつた。その日もまた宵に一冊二錢の雑誌が二三冊賣られただけで、夜の十二時を迎へて。店を仕舞つた私は、例のどほり自分の敷いてゐた古毛布に商品をくるんで乳母車に入れ、其の四五日前から註釋付きのを読み出した論語を口の中で繰り乍ら、こそくと家へ歸つた。そして引き寄せてある戸を開けて、乳母車を引つ張り込んだ、不圖氣が付くと、六燭の電燈がぼんやりと薄暗く點いてある下のところの上り端に腰を掛けて母が懐手をしてうなだれてゐる。あゝ、其の頬は幽靈の如くに蒼いではないか。人々の寝しづまつた夜更け、現在生みの母には相違ないさ知り乍ら、私はぞつとしたのであつた。氣のせいとその蒼い頬に亂れた三すじほどの髪の毛は、たしかに斯の世の人の髪の毛ではなかつた『母さんどうしたん

です』と私は、母が病氣であつたらうと云ふ不安よりも、死んでゐるんぢやないか、と云ふ恐怖が先に立つて、いきなり斯う呼んで見た。

『え』と返事はたしかにしたが、顔も身體も、もとのまゝでの返事である。私は胸はたとへかたなき悲しみに、早鐘のやうに騒いだ、病氣だと云ふことを直覺したからである。

『母さん、どうしたんです一體』とこの場合、私にはこの同じやうな聲より出なかつたのである。母はやうやく顔を上げて呉れた。

『今日はお晝から、かう氣持ちが悪いので、休んだのですが、物を言はうとするとひどく胸のわきが痛んでなあ、今もはかりへ行かうと思つてこゝまで起きて見たところが、一寸また痛むので、しあんしてるところです』嚴格な武家の娘として育つたのだと云ふ母は、余程のことでない限りは斯うした様子は見せない。夫れだけ私の驚愕は大きかつた。殊に寢衣の上に羽織を引つ掛けたそ



の姿は、どうしても一寸痛むぐらいでないことを十分に物語つてゐる。私は氣が狂ひさうになつた。

「母さん、お医者さんを呼ばつて來ませうか。そんなことをしてゐては風邪を引きますよ。お医者さんと呼んで來ますよ」と云ふと、母はあはて、

「宜し、よろし、そんな大したんでありませんから、それよりもお前寒かつたでせう。火鉢にお夜食が、かゝつてゐますから上つてお寝なさい。では母さんも休みます」と徐かに床に這入つて、祖母と母と妹三人に弟一人、これだけは下の八畳で寝るのであつた。私は小鍋の蓋を取つた。松茸がうどんに煮込んである。私は、何がなし必ず少しでも取つて置いて呉れる夜食を樂しみに夜店に出また夜店から歸るのであつた。けれども此の夜は、夫れを食べ乍ら、母が、一つには子供等に心配させない爲めでもあつたらうが、醫者に診て貰ひたいのは山々であるのに、病氣を、おぞけ立つほど恐れる氣質として見透して

ゐるのに、よろしいと云つた心根は、明らかに醫者を迎へる入費と云ふことにあるのだと考へては、二りの美いうごんも針を呑むやうな思ひであつたのである。食べ終つた私は、涙を噛み締めて、階子段を昇つた。二階には二人の兄が一日の勞働にくたび切つた身体を正體もなく寝入つてゐる。親身の母の胸が病魔に喰ひ入られてゐるなどは夢にも見づに。

これが泣かずに居られやうか。私は小さい兩手に顔を押し當て、激しく慟哭した。折柄冷めたい下弦の月の光りが窓からしのびやかに流れ入る、私は其の夜まんじりともせず家に行く末身の行く末を思ふては泣くのみであつた。夜が明けて泣き腫らした眼をこすり乍ら、顔を洗いに起きて見ると、いつも薄暗いうちから起きて御飯の仕度をしてゐる母が未だ見えぬ。さてはと胸を突かれ乍ら八畳を覗き込んで見ると、母は目を覺ましては居るのだが、枕の上に顔を伏せて非常に苦しんでゐるのだ。



「気分が悪いんですか、え、母さん」と、私はまた隠されることは知り乍らも思はず訊いた。すると意外にも今度は、母の口から醫者を呼んで来て呉れと云ふ私は仰天すると同時に祖母を起すのであつた。

「お婆あさん、母さんは気分が悪いんですから、濟みませんけど、御飯を頼みます。僕はね、お醫者さんへ行つて來ますからね。」祖母もひどく心配をする。この聲に兄が二人とも起きて来て不安の顔を見合す。物音に驚いて末の妹が目を覺まして喧ましく泣き立てる。それで妹も弟等もすつかり目を開いて仕舞つて、母の顔を見てはしくくとする。これまでは貧ではあつたけれど何うにかかうにか暮しが立つて一家は兎も角圓滿であつた。夫れもこれも一朝の夢と消えて此の朝はまあどうだらう、眞に修羅場、鼎の沸き立つ情けなさではないか。私は其の一幅の悲劇の實現を後にして、醫者の玄關を叩く可く走らなければならなかつた。斯うして母は先づ病床に倒れつゝいて、一番下の妹、そ

して私が無理にすゝめて、發病してから五日目に松波病院と云ふ名古屋で内科としてはまだ一番上手だとされてあるのへ、母と末の妹を一緒に入院させて家へ戻ると、自分も隨つて送ると云ふのを、兄さんは勤め先があるのだからと私が止めた兄らは二人とも出勤した跡で、私の直ぐ下の妹は學校へ行つて誰れからもおとなしいくと云はれてゐた。弟と其の下の妹とが火鉢のそばで泣いてゐるのではないか。

「お婆さんは」と私が聴くと、わつと二人が同時に泣き出した。何と云ふ慘ぞ母と妹とを醫院へ、今送り届けて來たばかりであるのに、また祖母は猛烈な癩を持病とは云へ、時もあらうに馴れないお勝手働きの結果か引き起して、蒲團もなの上に首を取られたやうに倒れて苦惱してゐるのである。どころへ間く學校から戻つた妹が、また何と云ふいたましいことであらう。わづか八つやそこらの身で祖母に似て持病があつた爲め、時候の轉期ではあるし母の姿が見



えぬのと、祖母の病氣に驚いたのがもとで、しばらく泣いて居たが、朝たべたものをすつかり吐いて了つた、これもまた寝込んだのである。私は氣違ひのやうになつた。いや今から思ひ廻すとたしかに氣違ひだつたに違ひない。家のついで近くに郵便局があるのに、わざ／＼廣小路の自分が始終夜店を出してゐる近所にある郵便局まで駆けて行つた。

『ヨニキトクスダカヘレ』と津の父へ打つべく、電文を考へて見たが、これではあまり父が驚くと思つて、今度は、

『ハ、キトクカヘラレタシ』と書いて見て、これでは父が祖母ぞと思ふか知ら夫れとも母だと考へて呉れるかしらんと迷つてゐると、其の電文を覗き讀みした局の若い女の事務員が、

『まあ、子供屋さんのおつ母さま危篤きやあも』と吃驚して呉れた。其の女の眼の色に、何うした拍子か、如何に此の電報を見たら、たゞさへいろ／＼心配

してゐる父が、また一しほ心を痛めることであらうと云ふことを考へて、急に電報を打つのを中止することにしたのであつた。家へ歸ると弟と妹が泣いてゐる。私は母と末の妹を病院に見舞ひ、傍はら家でもまた祖母と妹を介抱しなければならなかつた。そして夕方歸つて來た二人の兄へは、既に父の許へ電報を打つた體にして、三度々々の食事を自分でこしらへなければならなかつた。母の商賣の収入がばつたり絶えたところへ、私が夜店をまるきり休むので、其の日々々の家計すら困難になつて來た。其の苦しい中から、病院にある妹や母の費用を出さねばならぬ。家で寢てゐる妹に牛乳も取つて遣りたい、祖母に加減の好いお粥も食べさしたい。二人の兄も随分心配はして呉れたが、始終家に居て、すべてをして行かねばならなかつた私の苦勞は十年の後の今日意ひ出すだも涙のこぼれるほどである。けれども病人四人が四人とも尠しも快くはならぬ。もと／＼尠しばかりしか無かつた金はすつかり消えて亡くなつた。だ



ん／＼と斷崖へ進んだ。私は決心をせなければならなかつた。眞に脊水の陣の心地で、仕入れた古本を論語だけ残して賣り拂つたのは其の時である、病魔母と二人の妹と祖母の四人を倒して『ごども屋』は破産した。薪炭は一俵も無くなつた。此の上は二人自身の食費を差引くと、家賃だけしか残らない頼むに足りない兄の月給だけが、一家親子九人の命の綱でもあり、せめてものこゝろ頼みでもあつたのである。夫れにしても何物に呪はれ、ばこそ、斯くは悲惨の底に突き落された松尾家であつたことであらう。哀れいよく眞に電報を打つて、父を驚愕せしめねば、方の付かぬ成行きなのであらうか。

## 六 あゝ死の聲

### 『通夜物語』

松尾家は運命の神から憎まれてゐた。けれども見捨てられては居はしなかつ

た。それが實に有難かつた。注文してあつた炭と薪が、金を送つて遣らないのと同郷でよく知り合ひの人であつたので停車場前の兄の出でゐた運送屋まで送つて呉れたのである。兄が其の夜歸りなり話したので、荷馬車賃を恐れた私は其の明けの朝早々車を持つて行つて三度ほどに運んだ。先づ一息である。そこへ寒さに向つたので素的に夫れが賣れ出した。間もなく家で寝てた妹が先づ治つて續いて祖母が起きて呉れた。私はよろこび乍ら、夫れでもまだ氣づかつて焦がしたり硬すぎたりして兄に笑はれ乍らも御飯焚きを續けてゐたが、いよいよ全快したので、また祖母がして呉れることになつた。これで病院の方さへはか／＼しくゆけば占めたものであるのだが、さうは行かぬ。もつとも子の方はたいてい快いのだが、何分乳香兒であるから離せない。その前日に行つた時に乳を吞ますと不可ないと云はれたと云つてゐたので、ミルクを二鐘買つて晝頃病院を訪ふと、其の朝二三日前から云はれてゐた、水を取つて貰つたので、大



變氣分が好いと云つて母の顔色がよかつた。

「母さん、家の方は、もつとも。もとかから母さんよりは軽かつたんですけど皆治つて仕舞ひましたよ。母さんも早く快くなつて下さいね」と云ふと、

「あゝ、もうおほかた良いのですから、明日にでも、退院させう。第一息屈ですから」と云ふ、私は尠なからずあはてた。

「そんな無理なこと云つちや嫌ですよ。商賣は實際よく流行るんですから安心して、すつかり良くなるまでゐらつしやい。息屈なら本でも讀みませうか。」

「えゝ、讀んでお呉れ」私は近くの貸本屋から二三冊の講談本を借りて來た。それは自分も讀みたかつたものである。私は此の時分あらゆる講談を讀んで居

た、便所へでも持つて這入つたものであつた。すると、

「正直、母さんは小説でなくてはきらいです、讀めますか」と云はれて、私は面喰つた。小説なぞと云ふ本は、まだ賣つてはゐたが一度も目を通したことが

なかつたのである。けれども「讀めますか」と云はれて、「讀めません」とは、死んでも云はれるやうな所ではなかつた。

「そうですか。では借り直して來ますか、えゝ讀めますとも」と云つて持つて來たのが忘れもしない、何んでも宜しいと云つて本屋の主人に撰つて貰つた、小

杉天外氏の「蛇いちご」であつた。ところが悲しいことには讀んでも自分にはさつぱり意味がわからない、けれども幸ひにして母は非常に嬉んだのである。

しかし私にとつてはこれくらい。つらいつとめはなかつた。

内容ははじめの方は少しも解することが出来なかつたのであるが、後半はぼんやりと覚えてゐる。何んとなくロマンチックな美しい繪でも見るやうな氣持

ちのするもので、田舎のある豪家の息子が、近所の娘を戀して、それが親達の知る處となり、雙方離間策を講じ出したのである。一日二人が葡萄畑で逢引して互ひの意中を語りながら泣く、と云ふやうなものであつた。それから二日に一



冊ぐらいの平均で、ずうつと十一月一杯、十二月の半ば頃まで病院に居た母の爲めに、私はたくさん小説を読んだ。當時の文壇を聳動させてゐた、『金色夜叉』や『伯爵夫人』も私は目を徹した中で一番私の驚異となり、刺戟を受けたのは新小説と云ふものが、すつかりわかるやうになつてから、同じく病院の窓で母の爲めにひもといた、泉鏡花氏の『通夜物語』である。筋は、花魁の丁山と云ふお侠で勝氣な、純江戸式の意氣地に富んだ女が、ある動機から青年畫家の清といふ男と戀仲になり、二人が二人とも金銭上の問題から、非常に悲惨な境遇に沈むやうになつたが、ある席上で金銭の敵、戀の敵と目してゐた人々を面前に置いて、丁山は自分で自分の腹を切り、斷末魔の苦痛を意に介せず、清に請ふて、迸しり出る血潮で自分の肖像を描いてもらい、それ等の人々を捉へて頗る痛快な氣焔を揚げながら死んで逝くと云ふ、憐しい作物である。此れを讀み完つてシーツの上に横たはり病む母の姿を見ては、自分で死ぬる病ひで死ぬる

けじめなぞのつかばこそ、若しや母が死んだら、との死の聲は、卒然として私を懊惱せしめたのである。同時に、青年畫家に極端な同情の立場で書かれたこの『通夜物語』が後に私をして畫家の書生たらしめ、『通夜物語』の所謂朦朧的神秘的傾向の發芽があり、音樂的調子に富んだ濃艶な纖巧な撫寫と深刻な描想とが後年に至つて、一時文士で立つたらと云ふ野望を私に懐かしめた、唯一の源泉であつたとは今に至つて思ひ當るのである。あゝ死の聲に満ちた『通夜物語』よ、夫もこれも、一昔前の思ひ出である。

## 七 そゝのかされて

### 寫眞屋の見習

さうかうするうちに、根がぶらぶらの性質の病氣であるから、全治とは云はれないが、兎も角、母の病氣は一枚々々薄ひ紙が剝がれて行つて、十二月十



九日に無事退院した。そして、父がいよく津の古戦場の跡かたづけを済まして、其の年内には歸つて来ることになつた。家も先づは、薪炭屋として暮しが立つ。其處で考へねばならぬのは、私自身の身の上である。母も夫れに就いては夜店ばかりしてゐてもと種々考へたが、其の當時同郷で私より三つ年上の少年が名古屋へ出て来て大津町の伊藤と云ふ寫眞屋へ見習ひに這入つてゐた。夫れが夜店で遇然顔を見合して、以來友達のやうにしてゐたのが、「君、寫眞屋は金が儲かるせ」と云ふので、急に其の氣になつて、同月二十二日と云ふに、大須公園内の青山寫眞館に使はれることになつた。

それにしてもこゝで振り返つただけでも、何と云ふ恐ろしい轉變の身の上ではあらう。鈴鹿の一寒村に育つた私としては、名古屋城は外國のごとく遠いところにあるものであつた。夫れが僅か十才の時に家内中と共に其の城の下へ移らなければならなかつたと云ふのさへ、大海に木の葉の流れ入るやうな大きな

愕ろきであつたものを、樽拾ひとなり炭屋の小僧を経て、夜店で桃の叩き賣り西瓜屋、梨屋、冷やし飴や、古本屋、そして病院の母の枕邊で二月近くも小説を讀んでゐた身が、今は寫眞屋の見習ひ小僧。一年にしてはあまりにあはたしいうつりかはりではないか。名古屋の驛頭に立ち私は伊勢參宮をたびくして、二見へ行く電車には幾度も乗つたことがあつたので、はじめて見た譯ではなかつたが、二見のに比べて其の立派さに目を瞬つた時には、木枯しが颯殺として肌へを刺した。雪が何度も降つた。間もなく正月が來たが寒さはますます度を増すのみであつた。さしもの金の鱗も頗るかじけて見られた。それでも二月が來ては、矢張り梅が咲いた。桃の頃を過ぎた四月中旬は、鈴鹿の里と同じやうに、繚亂たる櫻花が來た。一步郊外に出れば、其處には菜種の春がちらりと居た。若葉の五月、青葉の六月、七月八月の炎天には廣小路のポプラ並木にも蟬が思ひこがれて鳴いた。九月になればもう秋である。十月十一月と寒さ



に向へば、瓦スストーブの焚かれた病院の側下も、ひとしく日に月にうら冷め  
たくなりまさつた。悲しい十二月はまためぐつて来たのである。

寒い十二月、しかし寫眞屋の小僧としての私の手はいくら雑巾を絞つても、  
もう樽拾ひ時分のやうには粗れなくなつた。皮膚も貧に馴れ氷を割つたやうな  
水にも馴れ切つて居たのである、生れてはじめて他人の飯を食ふことになつた  
私は味噌汁の冷えたのも美味かつた。澤庵の尻尾にも夫れ相當の味を發見して  
かぶり付いて喰べた。食ふや食はづの一年を過した身には、此れも結局御馳走  
の部類であつたのだ。伴なつては十二時に寝て、三時半に目を覺まさなければ  
ならないのも、樂過ぎる位であつた。公園の中のことであるので、表が廣い廣  
い、夫れを身体の倍もあるやうな大きい箒で朝晩隅から隅まで掃除せねばなら  
ぬ。夫れを一氣に續けてもとは徳利を満載した荷車を轆き廻した腰は、少しも  
痛みはしなかつた。第一働くのが面白くなつて来た。私はほんとうに二十日鼠

のやうにきり／＼と能く動いたのであつた。

また正月が来た。私は御仕着せと云ふものゝ經驗に始めて沿した。夫れか  
ら足袋を買つて貰つたり、下駄を拜領したり、考へやうに依つては奉公と云ふ  
ものも滑稽な興趣のあるものである。夫れと云ふのも、一つには御主人様の御  
氣に入つてゐたからでもあらうけれど、斯んな生活で、私は十二の年を恰度半  
分送つた。三四月頃からは「水替へ」と云つて、ピーオーピーなりプラチナな  
りまたプロマイドなり 焼き上つて、色揚げも濟んだのが水に浸かつてゐるの  
の、水替へ方を寫眞の仕事の第一歩として教はつた。お客の下駄を揃へたり、  
形や値段を決めるお相手に出たり、領收書を書いたり夜寫しの位置を付ける時  
に返射鏡のみ附いたランプを持たされた時代よりは妙しく出世したことになる  
のである。次ぎに印畫の「焼き付け」方を習つた。此れはなかく熟練を要す  
る仕事である。恰度子供が青寫眞を焼く時に用ゐるのと同じやうな梓に、先



づ種板を箆め、夫れに印書を入れて、日光で焼くのである。度が過ぎると眞黒になつて仕舞ふ。足りぬと幽霊のやうにぼんやりしたものしか出来ない。夫れを何十と棚に並べて、一枚の原版に對して、三枚なり五枚なり注文通りの數を焼いて行くのであるから、並大抵のことではない。「水替へ」で寫眞を破らせでは叱られた私は、此の「焼き付け」に於ては、未だ使つてない藥紙を知らずに日向へ置いて駄目にしたり、種板を取り落して壞はしたり、「馬鹿だ」と云はれるのが幾度であつたかも知れぬ。次ぎに覺へたのが「仕上げ」と「張り付け」であつた。「仕上げ」はすつかり出来上つた寫眞に化粧紙を付けはこりや何かが這入つてゐた爲め、ぼつり／＼と焼け残たところがあるのを、細い筆で墨を入れるのである。またプラチナなら 尙燭を付けた綿で二三度撫で、艶を付ける「張り付け」は「水替え」を幾度もして清らかなになつたのを、臺紙へ張るのである。夫れには臺紙の大きさに合して印書を切らねばならぬ。圓いのがあ

る、隨圓形がある、菱形がある、大變なことだ。その他「ガラス磨き」と云つて、ピーオーピーを艶を出す爲めに張るガラスを磨くことを習つた。「ヒント」と云つて、寫す人物に對する機械なりレンズなりの上下進退の方法を習つた。「光線」と云つて、寫し場のガラス天井の黒幕茶や白の幕を動かして、鼻筋を立てることを習つた。そして私が寫眞屋の小僧として一番の後で教へられたのが「修正」である、修正とは、種板を鉛筆で、直すのである。是の腕一つに依つて、へちや面も美人になり、好男子も醜男に化るのである。髪や眉毛を濃くすることも出来る。口や目を小さくしたり大きくしたりすることも難くはない。甚だしいことになる、着物を着せ替へたり、首を抜き變えるのも不可能ではない。されば座つてゐるのを立たせたり、立つて居るのを寝させたりするぐらいはお茶の子さい／＼である。近來は「ハテナ」と名附けて一枚の寫眞に一人の人間を前向き、後向きと二通りにても映たりする。是れ等はみな薄暗い「修



正室』から生れ出るお化けなのである。實際に撮映してから撮映たのを、現象液で現象するのと、夫れからもう一つ、焼き上つた印畫を『色上げ』することだけを習ふまでに行かなかつた。青山寫眞館から暇を取つたのは、六月のはじめのことであつた。私は此の寫眞屋の小僧生活の半歳のうちに、日夜一冊の論語や一生懸命で複習をしたので、暇を貰つた時には、悉く了解し暗記することが出来てゐた、是れが何よりの收穫であつたのである。

### 八 彩管に親しむ

寫眞屋を出たのは、私は書家を志望するに至つたからであつた。もう此の時は、家と離れて仕舞つて居た。寫眞屋奉公中も一度も親に逢ひに戻らなかつた私は、寫眞屋の暇を取るのも自分一個の考へであり、書家の志望を抱いて居ることなども、勿論相談に行つた結果では決してなかつた。そこで私は今も以前

の名古屋新柳町に住まはれる、鈴木松年門下の谷藤龍麟氏の書生として彩管に親しむことゝなつた。夫れまで多くの職業に就いたが自分の目的であつたのではないことは、云ふまでも無く、寫眞の見習ひもまた他人にそゝのかされた結果であつて、何を教へられても心から覺える氣にはならなかつた。しかし書と云ふことは兎に角に、自分が立てた目的であり、自分が選んだ道であつたので一心不亂に稽古することが出来た、先生も「筋が宜いから直き上達る」と云つて下さつた。

一方私の讀書力もだんく増進した。そして殊に現代に名ある日本畫家の經歷などのある本は、片つ端から讀破したものである。尾竹國觀氏の身の上なんかからは、眞に強い感動を與へられた。今だに詳しく覺へてゐる。國觀氏は今でこそ第一流の畫名を博して、斯界を睥睨する勢は實に堂々としたものであるが、十五才までの氏の經歷は實に悲中の悲、慘中の慘、聞くも涙の種であつ



たのだ。

氏は新潟一と云はれた紺屋、紺倉事尾竹倉松の三男に生れ、二つ三つのころまでは蝶よ花よとはぐまれてゐた。ところが氏の父は非常な書畫骨董狂で、田舎廻りの繪師などを半年一年と泊めて置くやうなことが常であつた。氏が三才の時のことである、父が泊めて居た旅繪師の妻と關係して、とう／＼氏の母を離縁して其の繪師の妻を後妻とした。氏の哀史は之れから始まるのである。

この事があつて以來、家運は日々に衰へて、遂には店も人手に渡さなければならなかつた。今日に差支へる悲境に陥ちて了つたので、國觀氏は兄の竹坡と共に、縁日の大道に蓆を敷き、少し習ひ覺えてゐた南畫を描いて、僅かの金を得ては父と義理の母を養つたのであつた。當時氏は實に五才、竹坡は六才であつた。長兄は越堂と云つて、これはこの時分既に東京へ出てゐた。家庭が不和であつたからである。斯うして國觀氏は、竹坡とどうしても畫家になつて、父

母を養なつて行かなければならなかつたのである。夜間は一生懸命に研究をした。さうしては晝は人の依頼に應じ、休む閑と云つては僅かに三四時間睡眠する許りであつた。そして氏等は何うして晝を研究したかと云ふに、一の臨本もなければ、一人の教師もありはしなかつた。唯だ四つ五つの時分にこれも先夫のを見覚えの義理の母が、二三度手を持つて習はせた。其の後は單に寫生と想像とがあるだけであつた。當時氏の理想は、九つになつたら東京へ出て立派な先生につき、晝道の奥義を究めたいといふのであつた。ところが運命の手は氏を東京に齎らさずに女郎屋の養子として拉し去つた。氏が貧窮のあひだに育つたのであるのに、早くから粹事を解し遊藝に通じてゐるのは、これが爲めである。

けれども夫れは一年ほどで離縁になつた。再び家に歸つては見たが、貧因はいよく加はるばかりで、思ふやうには御飯をも食べることが出来なかつた。



父はそれで竹坡と氏とを連れて、越後の國を端から端まで彷徨つた。五泉、大野三條、白山の諸町は、氏等の永く足を止めたところである。行脚をしては田舎若の依頼と云ふよりも同情に對して畫を描いた。其の潤筆料が一枚一錢から一錢五厘であつたと云ふのだから驚くではないか。其の描く畫は、清正公様、牛若丸、日吉丸、觀音様、不動様と云つたやうなものが多かつた。田舎の爺さん婆さんは之れを床に掛けて禮拜するのである。氏が今日歴史畫を得意とするのは、蓋しこの時分の修養であらう。此の時分には氏は國坡と號して居たが、教育と云つては女郎屋の養子であつた時分に一年を小學校へ通つただけであるから落款を書くことも出来なかつた。それで竹坡と氏とが畫を書いて終ふと、父が引取つて落款を書いたのである。今でも越後の山村に行くと、國坡と云ふ落款のある軸が、煤だらけの床に眞黒になつて、花や線香などを手向けられてあると云ふ。此の時代の氏と竹坡は畫の爲めに畫を描くのではなかつた。口の

爲めに描いたのであり、また父母に書かされたのである。苟しくも一錢でも金になることなら、何んでも描いたので。カラクリ人形、幻燈の畫、ノポリ、看板、押繪の數は云ふまでもなく、賣藥の袋、店のビラ、年始の贈り物にする賣藥屋の錦繪などみなやつた。

十一二の時には、もう富山日報、北陸政論、北海民政新聞、明治新報などの小説の挿畫が描けた。また富山縣地誌、日本地理、世界地誌などの挿畫も引受ける自信を持つた。氏が十二才の時のことである。當時の小年の間に大層な勢を有つてゐた雑誌「少國民」の懸賞募集に應じて『日吉丸雨中に刀を拵ふの圖』と云ふのを書き、一等に當選した。そして夫れからも何度も同誌の選に這入つて、十五才の時に上京する機會を得たのであつた。氏は上京の後も感ずるところがあつたか、矢張り獨學で今日に至つたのである。と云つたやうな意味のことを何かの雑誌の中から見付け出して、幾度も繰り返しては讀むのであつ



た。氏が三男であること云ふことが、十一二から既に世間に認められたと云ふことが身につまされて、第一に他人事ではなく思はれたのである。

### 九 新發明をして森村翁

に認めらる

行雲流水、何をして何處に居ても月日は實際夢であつた。唐紙の半折に自分の考へ一つでやうやく繪がと、のつて来るやうになり、先生の畫會の席上へ出ても余りまごつかなかつた時分は、もう私が入門してから、まる一年を過つた後であつた。私も十三になつて居たのである。

私は考へずには居られなかつた。無學の悲哀を自からしみん、感じ出したのである。何をすることも、もう少し學問がなくてはならぬ、これからは學問が無くては明盲目も全じだとも思ひ出した。私は一夜師の前に出て破門を乞

うたのである。先生は再三惜しんで下さつたが一旦自決した以上はもう動かないのが私の生れ付きである。私は斯うして恩師の家を辭した。街路はまた夏が来てゐた。氷屋の聲が勇ましかつた。空は毒々しくも蒼く晴れて、力の溢れた白雲が何物かを暗示するやうに立ちはだかつてゐた。力、さうだ努力して學校へ這入らう。私はこの時も家へ歸らなかつた。夫れは父が居るから安心だといふ考へと、如何にも疲れた祖父や祖母や兄妹や、また父の顔を見るに忍びなかつたのである。

繪の覺えがあるのを幸ひ、私は腕さへあればどんな子供でも相當の賃金を取れると聽いてゐた。中の兄が通つてゐる市外中村森村組と同じ經營者が社長の日本陶器會社の書書きを望んだ。ところが其の方は人が一杯で、遂に同會社の轉寫工場の一職工として労働することになつたのである。

「轉寫」とは玩具の寫し繪と同じ意味のものである。鑛物性の繪具で種々な模



様が紙に印刷してあるのから、思ふものを鉄で切り離して、夫れをニスを塗つた白地の陶器に張り付けるのである。百余人の職工が毎日夫れに従事してゐて日に幾千と云ふスープ皿や菓子入れ時計臺などがどしどし出来上る。服部時計店の注文も来た、明治屋からも三越からも数知れぬ注文があつた、宮内省からは畏くも純金菊花御紋章の御用命が日々あつた。海軍省や帝國ホテルなどからはマークの注文が殺到した。是れ等のものが悉く轉寫作用に依つて、最も敏速に注文を満たして行くのであつた。現に銀座の服部時計店の前に立つ人は、人間業とは思はれぬ精巧な小鳥の繪の描かれた硬質性の磁器臺時計を見るであらう。夫れは皆私の働いて居た轉寫工場から生れ出るものであり、其の模様は59と云ふ番號で、轉寫としては極く手軽に扱へるものゝ一つである。普通入社當時は「轉寫切り」と呼ばれて、轉寫紙を模様の一つ一つ、張る際に便利なやうに余白を切り落す役目の専門を申し付かるのだ。けれども私は繪心がある

と云ふので直ぐ張る方へ廻された給料も三十五錢を支給された。全工場は總て日給で、また數ある職工の中でも十五六までの者では、三十錢以上を取つてゐるものは三四年と云ふ永く居る二三人の考に過ぎなかつた。私が十三才として此の高給は實に異例であつたのである。私は殊遇に動かされずに居る譯には行かなかつた。今に何分なり立派な仕事をして、酬いなくてはならぬと心に叫んだのであつた。

同會社は立派な寄宿制度が備はつてゐる。私は家へ歸らない心算の身で夫れへ寄宿した。また社内には同仁書院と云つて、大低の書物と云ふ書物を網羅して、職工が家へ持つて歸つて讀んで來ようと、寄宿へ持つて來て置かうと自由になつて居た。私が此の同仁書院から得たところ、實に尠少ではなかつた。

轉寫工場の主任は今尙勤續して居られるかどうか、大柿喜三郎氏であつた。私は入社して間もなく、氏の優遇されるのに發憤した結果であつたか否なかは



知らぬ、偶然同工場の組織を根底から改革せしめるやうな一つの仕事上の新發明をした。

新發明とは外でも無かつた。此の轉寫事業には『ぢぢる』と云ふ禍根があつて、夫れは本場の獨進や佛蘭西でも到底免かれることの出来ぬものとされてゐた『ぢぢる』とは其の名の示すやうに、生地の方にニスが塗つてあるとは云ふものゝ夫れに張り付く第一の必要な性質はまるで違ふが、一種のゴムノリが轉寫紙に多量含ませてある。其のゴムノリの爲めに折角美しく寫つて居た繪が、一度火釜に入れて見るとすつかりぢぢられて、見るのも汚ならしいものになつて仕舞ふのである。そして其の傾向は幾片も重なつた重派な繪であるほど、隨つてゴムノリが多量で甚だしいのであるから堪まらない。販賣部の方でも上等の繪の注文をどん／＼引受ければ儲かるのであるが、此の大困難がある爲めに、空しく斷はり、多數に取り寄せた人物であるとか、獸類などの轉寫紙を、眞に

寶の持ち腐れで弱り切つてゐた。もつとも極く單純な繪でも、唯だそのまゝ、火釜に入れては矢張り悉くぢぢられて了ふので、『海綿掃除』と云ふことで、其のノリ氣を薄くするやうに努めてゐた。『海綿掃除』とは上等の柔らかない海綿で、張つた直ぐに磨いては繪が禿げ落ちるから、一度かん／＼に乾かして夫れを洗つて居たのである。『海綿掃除』は非常に困難な仕事であつた。何んな寒い嚴冬でも、湯でしては繪が流れるから、水で一つ一つ洗はねばならぬ。そして尠しでも『海綿掃除』が足らぬと焼き上つてから艶が出ない。またもう少し悪く行くと『ぢぢる』夫れで、危険だと思ふのは一度海綿掃除を濟まして乾かし、また一度、また一度と、實に多いのになると五度近くも面倒なことを繰り返さなければならなかつた。私が入社した當時は尙此の方法で苦しんで居た時であるところが入社してから三月ほど経つてからのことであつた。私は既に十八一卓子の部長を命せられて日給四十二錢、僅か十三の身で、一番下の者でも十五



大きいのは三十近い職工九人を部下として一心に働いてゐたところが、矢張り苦しむのは「ぢやる」ことである。そして辛いことには、ひどくぢやることがある。夫れを作つた本人よりも、先づ其の部長が責任を問はれなければならぬ。私の部下からも續々「ぢやる」の犯人が出て私は随分苦しめられた。其處へ情ないことには、部下のものが、みな年上であるので相當注意を與へることとは出来るが、他の部長のやうにのみく叱り付ける譯には行かない。其の上間もなく、辨償法と云ふことが設けられて、ぢやつて不用に爲つた品物は、ぢぢらした本人が半分、其の部長が半分宛出しあつて償のはなければならなくなつた。さあ大變である、ぐづ／＼してゐると給料を貰ふどころか、何うかする金を持って出なければならぬ騒ぎも、無きにしも非すと云ふことになつて來た。殊に部長には難儀な仕事が廻つて來るので、うか／＼すると、皆ぢやつて仕舞ふ。私はとてもこのことに退社をしようかと、思つたりじた。辨償法には

他の職工も部長も一樣に弱つて溜息をつくのであつた。實際酷な遣り方であるけれどもさうして職工に同盟休業をされるか、夫れとも尠しでも缺損が助かることになるかと云ふところ、のるか反るかをしなければならぬまでに、轉寫工場の經濟も悲しいかな行き詰まつて來たのであつた。

私は、何うしたらぢやらなくなることだらうと云ふことに就いて、實際自分の損得ばかりではなく頭を悩ました。其の結果先づ思ひ付いたのが、轉寫紙の切つたのを、卓子の上に水を浮かして、夫れへ繪の方へ水の廻らないやうに浸して繪がゴムノリと共に尠し浮き目になつて來てから張つて幾分ゴムノリを脱かうと云ふことを考へ付いた。早速實行して見ると、なるほど焼け上つた結果はぢいらぬ。けれども、これまではべた／＼と張つて行くことが出來たのが繪がぶか／＼になつて居るのであるから、さうツと張らないと、模様が曲つたりなんかして不可ないし、第一これまでの幾倍の手間がかつて明らかに失敗



である。私は其の日、仕事が寝てゐるやうにのろいやないかと、皆から笑はれ損に了つた。しかし失敗は遂に最後の成功であつた。其の失敗に依つて、繪が濡れてゐるうちにゴムノリを落すやうにすれば宜いのだなと、考へ起した。けれども夫れはまた言ふて行はれないことで、誰れでも繪が乾かないうちに掃除をすればのりがよく脱けることは知つてゐるのであるが、夫れでは繪も共に流れて仕舞ふ。ところが斯うした難儀の末いよいよ新發明の方法は成就した。新發明の方法と云ふのは、これまでではニスを塗つたのが乾き加減になつた上へ轉寫紙を付け、其の上から恰度寫し繪を手へ張り其の上から濡らすと繪がはじめて手に寫るやうに、水を含ませた海綿で押さへて、直ぐめくつてゐたのであつたが、私の發明したのは、夫れを直ぐめくらないで、洗ひ桶の中へ放り込んで水の中でめくり、其の上を矢張り水の中で二三度海綿で押さへて置く、夫れで宜いのである。即ち乾かないうちに海綿で押へるものであるから、繪は

流れないで其の拍子にすつかりゴムノリが抜かれて了ふのである。發明は成功した。はじめ先づ一個だけに試みて焼かして見ると少しもぢらなればかりか、曾て無い光澤が出て居るではないか。私は雀躍した。次ぎには夫れを大膽にも思ひ切つて一千組のコーヒー茶碗に應用して見ると、悉く立派なものが出来上つて、最初夫れには轉寫部の方の功名ではなく、釜焚き人の偶然の手柄として研究すべきところとしたまゝで葬り去られようとしたのであつた。さう云つて居る大柿主任の前へ私が出て是れは斯様々々の結果だと云ふと、さあ大騒ぎである、早速其の日から夫れを全工場で行つて見ると美味くこれまた成功である。夫れが爲めに轉寫工場は折柄初秋のことであつたが、まるで春が来たかのやう、釜からあがる品も品も好い色艶で生れる。其處で主任は、私に命じて人物や犬猫の大きな繪を試験せしめたが、これも立派に行つた。さあもう恐れるものはないのである。早速其の日から工場には大工が這入つて、一部ごと大



きな流しが拵へられ、夫れに水を張つて、どん／＼海綿掃除は涉ごることになつた。斯うなると、これまでは張るのも、海綿掃除も一人でしなれば「ぢい」責任が判らなくて困つたのが、はじめて、張るものは唯だ張る、河綿掃除は唯だ海綿掃除と、一部一部と文明的の分業も施すことが出来、また海綿掃除も手間取らなければ、磨いてゐて禿がすやうなこともなく、「ぢい」憂いも無いので、職工一同一心に働ける。實に従來の倍の品物がしかも立派に一箇の犠牲品もなく、日々出来ることになつたのであつた。

私は、一職工の身としては、實に有難がらなければならぬ、社内からの賞金を受けた。そして主任から、「今後どう云ふ方面に目的を持つてゐるのか」と尋ねられたので、「美術學校へ通ひたいと思つては居るのであるが、夫れはとて不可能のことだから、中學程度の夜學へでも行く心算である」と云ふ意味で返事をする、夫れは實に社長森村市左衛門翁に、海綿掃除の發明が認められ

て「本人の望みに依つては補助しても宜い」と主任に相談されたからであつた夫れで、いよく「學資を出さう」と云はれるまで進んだのであつたが、茲に此の光明の網がぶつりと絶たれる。私にとつてはこの上もない悲劇が起つた。夫れは、森村翁は夫れまでも随分澤山の青少年に學資を出して居られるが、夫の候補者として合格するには、前途が長い勉強であるから、身體が壯健でないと駄目なのである。私は生れ付き、別に病氣と云つては無かつたが、弱い子供であつた。

体格検査を受けて、不可ないと主任が氣の毒さうに言つて呉れた時には、私は、眞に千仞の谷底へ突き落されたやうな感を禁じ得なかつた。其の夜私は、寄宿の固い蒲團にくるまつて、泣いて泣いて泣き抜いたのである。世絶えなば絶えよ、身亡びなば亡べと。

夫れまでの私の月日もすくなくならず不幸な月日であつた。随分逆境つづき



であつたけれども其の間自から慰さむるところあつたのは將來の榮達である。夫れが、身体が弱いと宣告をされては、ことごとく無幻の泡沫となつて果てるのではないか、どうして斯れが自から悲劇だと名附けて苦悶せず居られやうぞ。

### 十 お、大日本國民中學

#### 講義録よ

「お、大日本國民中學講義録よ」私はかうして東京に住まつて、駿河臺を通るど、何時も我れ知らず、呟やくのはこの一言である。お、大日本國民中學講義録よお前は、實に私をして、兎も角今日あるを得せしめた何ものよりの恩人である。十八にして新聞記者になれたのもお前のお蔭であれば、新聞記者になると間もなく主筆の椅子を占めることの出来たのもお前の恩である。十九才の

今年、言葉替へて大正五年の夏七月には、郷國三重縣一新聞の主筆として聘せられて行き、

『縣の生き燈臺とまで、謳はれたのもまたお前の方である。』

捨てる神あれば救くる神もあると云ふ。身体が弱いからと云ふので、森村翁の學資金を受けることが出来なくて落膽した私には、心を取り直して、『倒れるまで』とも覺悟してから間もなくお前を發見したのであつた。

其の頃私は日給五十銭になつてゐた。一箇月にして日曜が四回ほどあるけれど、夫れは早出や夜業で埋め合せが付くので、兎に角に十五圓以上にはなつた。そして寄宿料が大變に安いところへ、着物は工場服を着てゐるので尠しも要らない。兼ねてからの通學志望を果たすは、實に何等のさしさわりもなかつた。私は夜になると市街へ出て夜學を捜して歩いたものだ。ところが或る日曜日のことである。夫れは十一月のことで寄宿舎の窓にも菊の香がたゞようて、私や



一同の職工の孤獨をなぐさめた。例のやうに同仁書院へ朝から這入り込んで何の本にしよう彼れにしようかと迷つて居ると、不圖目に止まつたのが、『中學講義録』お前なのだ。

もつとも夫れまでも、一冊も洩れずに揃つてゐたお前の質素な姿が、澤山の職工の爲めに始終四五冊しか残らない好評さは、決して私の心を惹かなかつた譯ではなかつたのであるけれど、打ち開けた話が如何に勉強をしたと云つても高が尋常四年へ一寸顔を出した斗りの十三の子供であつたから、實のところ『講義録』の講義の二字が私の頭には徹底してゐなかつたのだ。

ところがこの日は『巖窟王』など云ふ面白い翻譯ものを讀み完つた後であつたので、私の讀書慾は、尠しく眞面目なもの、と云ふ方面へ向いてゐた。中學程度の夜學と云ふことが始終頭にあつた私は、中學と云ふ二字に一寸氣を止めて、お前の最初の方の三冊を寄宿へ持つて歸つた。

驚異、驚異、お前の親切に出來た内容は實に私の驚異であつた。さうだ「何を苦しんで私はこれまで夜學なんかへ行かうと考へてゐたのだらう」と私は誰れにでもない『中學講義録』のお前に聞えよがしに斯う云つた。『講義』の意味のまだしつかり判つてゐない、尋常もろく／＼行つてゐない私ではあつた。けれど、幸ひ夫れまでに随分讀書をしてゐたので、お前の第一卷の教へ子となるべくは餘り骨は折れなかつた。そして私は嬉しさと面白さにと、他の一さいの書物を捨て、暫らく、ひたすらにお前に心を寄せた。お前は其の翌年の秋轉寫工場を出てからも、上京してからも、たしかに滿三年間は私の良師であつた。薄運な私にとつて實に、お前『中學講義録』は『社會』と云ふ波風の荒い海へ出るまでの、羅針盤であつて呉れたのだ、私は感謝する。

さら／＼落つるお茶の水、お茶の水橋を挟んで、お茶の水の女學校と相對した駿河臺のお前の家は、ほんとに何と云ふ懐かしさを私に持ち來す洋館であら



う。  
 お、大日本國民中學講義録よ、少年の時分のお前の教へ子の一人が復たお前の家の膝もとへ歸つて來た。ながい、漂泊の旅から歸つて來た。旅の空で、年にも似合はず持てはやされること多くて私が思ひ出すのは何時でもお前の恩義であつた。北國路の雪の中に、中江藤樹先生のお墓を訪うた時も、先生の苦學を偲ぶのと同時に、私の遠く送る感謝の旅情はお前の家の立つ都、また都の駿河臺だ。もう一度私はお前の家のある土地へ歸つて來てお前の家を仰ぎ得ることを心から喜ぶ。私が旅に出た時分から見るとお前は一層内容が豊富になり、お前の家は大盤石の根ざしをしたやうである。お前は何處まで立派になるのだらう、何處まで發達をして行くお前の家ではあらう。お前の會長であり私の同郷である尾崎行雄氏が憲政會唯一の闘將として益々地歩を開拓されるやうに、お前の家もお前もまだ天馬の空を行くやうに果てしもなく出世するので

あらう。それにつけては山川氏が授爵されて狂喜した、赤門出の人も及びもつかぬ手の舞ひ足の踏みどころを忘れたうれしさが、私にはあるのである。また幾萬とも知れぬ私と同じお前の門下が雀躍するのである。私は洪蕩たる時雨の化のこの世のあるかぎり、お前の清烈さが老いようとは思はれない。また思ひたくもない。私はお前の一年先が早く見たい。五年十年の將來が早く眺めたい。お前の門下からは必らず一世を動かす大英雄大天才大實業家が生れるに違ひない。遠いことは云はぬ十年先き十年先き、一年の未來もつと、近しとも云ひ度い。  
 夫れはお前の教場は自由であるからだ、決して神才と凡手とを一緒くたにして教へはしないからだ。  
 此の大正五年の十月から十一月へかけて、合衆國の天下をウイルソン氏と奪り合つたヒューズ君も云つたではないか、「學校へ行くのは嫌だ。馬鹿な子と同



じやうにしか教へて貰へないのだもの』と。かうしてヒューズ君は小學校は一年ほどしか行かなかつた男である。夫れでこそ、一貧乏人の子に生れ乍ら、州の知事になり、大審院の判事に昇り、また大統領にもなる自信を有つた大器たることが出来たのだ。『大器晩成』など云ふことは、京都から江戸まで十五日以上を費やさなければ到着しないものと定まつてゐた五十年昔のものである。『偉い人』は少年時代から偉くなるべく教育され、また自分も努力しなければならぬ。其の點でお前は日本での出色のものである。

あたりまへの學校はどうだらう。明治維新のどたんばたん騒ぎで何の定見もなく國政に參與した惡賢こい連中が、一夜細工で出来あがつたまゝ、何の改革もほどこされずに年をとつただけではないか。もつとも或る程度までは廣く知識を世界に求めたことであらう。世界のありとあらゆるところから採り得る限りのものを採つたであらう。けれども何處の田から取つて來たところで田の泥

は遂に田の泥である。亞米利加と云ふ國、獨逸と云ふ國、佛蘭西英吉利、果して學校の制度で天下を蹂躪する點で謂ふところの田の泥で無いであらうか。田の泥ではいくら積んでも十層の高樓は立たぬ。いくら精選しても寶玉は出ない。日本の學校いや、世界の學校はみんな『田の泥學校』である。そして鶴が下りれば鶴、鷹が下りれば鷹を、みな落穂をついばむ雀にして仕舞はなければ止まない。その上悲しいことには情ない『制度』と云ふものが、鶴も鷹も否や應もなく田の泥の中へ引つ張り込む。くだいやうだが悲しいではないか。私は『大器晩成』論者である。大正新聞の主筆時代にも、私は斯うした立場の言論を數十日に亘つて發表した。其の時のことである。恰度暑中休暇だったので、歸省してゐた大學生が三人連れ立つて私を訪問した。一人は東京帝大の法科一人は京大の同じく法科、今一人は九州大學工科、そして私の『田の泥學校論』の讚として、田の泥學校のうちでも田の泥學校であるのは、中學であると喝破した



のである。實に小學は半遊戯的であるから未だしもであるが、中學校と進むと天才を虐げるのも一段と深刻に進むのである。けれども夫れは其のアトモスフエニーに浸つてゐる間は自覺は出来ない。三名の大學生が能い例しではないか大學までも學校生活をつゞけ乍ら『田の泥學校論』に賛成する位なら、何故中途に退かなかつたと、矛盾を突き込んでやるのは酷だ。大學へ這入つてから中學制度に氣が付いたんだから、そして恐らく三人の大學生は、『大學だけは田の泥ぢやない』と今だに玉川の砂ぐらゐには考へてゐるに違ひないから、しかし大學を卒へてから、高等中學に不足が出、社會へ働いて敗れてから大學も矢張り田の泥だつたと氣付くのは今から見え透いてゐる。

私も一時は、其の田の泥學校へ這入りたくて悶えた。森村翁から身体が弱いので見捨てられては泣いた。けれども今になつて見れば、雀は雀でも田の泥へ引つ張り込まれなかつたゞけで泥臭くはない。考へやうに依つては、身体が弱

くて薄運だと云うたが、其の實は身体が弱くて幸福であつたのだ。同時に身体が弱かつた爲めに、十年間人の世話にならずに通はせて『私は獨立心が強いのですよ』と、少し不正直を覺悟なれば云へもする。また云はなくてもたしかに獨立して來たのには違ひない。言ひ替へれば私は死なしい程度で身体が弱かつた爲めに誘惑に打ち勝つことが出來たのだと云ひたい。實際私は、現世の學校へ這入るのは誘惑されたのだと云ひたい。これを私が學校へ行けなかつたひがみ根性から言つてゐるのではない、と世間の青少年がたが感つて呉れれば、また何よりの幸福である。

しかし『中學講義録』と云ふ名のお前の懷裡は、何も自分の恩師だからと云つておべつかを云ふ譯ではないがたしかに神才は神才、凡才は凡才として自由である。一寸考へても御覽、夕立の時に、外に出てゐるもので、一合の量の茶碗には幾ら澤山降つても一合しか溜りはしないが、一石の大桶は一石の雨を受



けることが出来る。夫れと反對に植木鉢の空なのは仰向いてゐても、穴があるのでつゝ抜けてある。お前の内容が好いと云ふことを知つて居り乍ら、『講義録ではどうも勉強が出来ない矢張り學校でなければ』などと云ふ連中は此の一杯の茶碗にも及ばない植木鉢である。何も植木鉢なんかに清らかな『學問』と云ふ雨を溜めなくても『講義録』お前の任めが果たされて居ないとは云へぬのである。植木鉢は其の穴へ瓦の欠けらでも當てし、土を抱いて一生を送るのが身分相當だ。ところが學校は優に一石を湛える天才桶をも、其の底に穴を明けて植木鉢と同じやうにして仕舞ふから私は『田の泥』だとけなしたくなるのである。また『講義録』なんかは淺薄で何んにもならない』と云ふものは、『大日本國民中學講義録』のお前を知らないからだ。お前を知らないで講義録を云々するのは、古書にある『味はすずして其の味を説くは不眞摯』な人々である。中學講義録にもいろ／＼ある。最初お前に心酔した私は、講義録と云ふものはどれ

でもいゝものだと思つて、其のいろ／＼な中學講義録は大抵目をとほした。其の結果は柳の下ばかりに鱒は居なくて何れにも失望させられたのであつた。私は敢て云ふ、お前は『中學講義録』の王國であるぞ。

お前は私の恩師である『お前』と云ふべく餘りに尊い、許し給へ。

私の恩師よ、先生よ、先生の門下からは必らず逸物が出づるであらう。私は夫れを夢みつゝと云ふよりも眞實に眺める氣分で遠い旅から歸つて來た。先生の窓より巢立ちした泥臭くない一羽の雀が旅から歸つて來た。願はくば私の今後的一步々々をも見凝めて慾しい。

## 十一 八錢で名古屋から東京まで

轉寫工場では私も優待に優待をされたものである。夫れは云ふまでもなく新發明の功勞者であつたからではあるけれど、一つは晝を子供にしては宜く描い



たからである。夫れで入社にふしやの年としの十二月じふにがつに這入はひつてからは種々いろ／＼な品物しなものの新見本しんみほんばかりを張はらされることになつた。

また同仁會どうじんくわいと云ふ畫えの會くわいがあつて、一般職工はんしよくこうに繪畫心えいざしんを普及ふきふせしむるやうになつて居た。轉寫てんしやだから繪えごゝろは要いらぬやうではあるが、事實じじつは缺かくことの出來ないものであつた。繪心えいしんの無いものは、模様もやうの見本みほんが突つき付けてあつても飛とんでもないとところへ張はり附つけるからである。私は同仁會どうじんくわいの方ほうでも幹事かんじに舉あげられた。同會どうくわいは轉寫工場てんしやこうじやうの職工しよくこうでさへあれば誰たれにでも入會にふくわいが出来、會員くわいじんは一週間に一度宛唐紙さつからかみへ習ならつたのを出だして、主任しゅんじんに見みて貰もらふのである。悪わるければ次つぎの週しよくにも同おなじものを描かいて差さし出ださねばならぬ。良よかつたものは、次つぎ々々々々と新らしい手本てほんが書いて貰もらふことが出來る。私は本式ほんしきに一年ねんと云ふもの習ならつたのであるから、ごんな馬鹿ばかでも尠すくしは違ちがふ。それでこの方ほうでも仕事しごとの見本みほんを拵こしらへるやうになつてから一週間しよくかんはごの後矢張り主任しゅんじんに代かつて見本みほんを書くことになつ

た。實じつに私わたしは僅わずかか十三じふさんの身みで、四十しじゆにも五十ごじゆにもなつた者ものも居ゐた同工場どうこうじやうを風靡ふうびしてゐたのであつた。

年末ねんまつには千何百名せんなんひやくめいの職工しよくこうのある社内しゃないでの二等賞にとうじやうを受けた。職工しよくこうにしては實じつに莫大ぼくだいな金額きんがくであつた。私わたしは夫おつただけは別べつにして、其そののまゝ母ははの手許てしよへ送おくつた。家うちへ歸かへるのが嫌いやだと云ふ不孝ふかうものではあつたけれど、病やむ母ははの身みは片時かたときも案あんじられたのである。

正月しやうげつの二日ふたひであつた。仕事しごとは云いふまでもなく休やすみなので寄宿舎きやくしやくしやに寢ねそべつて本ほんを讀よんでゐると、母ははが尋たづねて來きた。十一じふいちの暮くれに別わかれた限かぎりで滿二年まんねんふたごし振り、母ははは矢張やばり病やまひの氣けが抜ぬけてはゐなかつた。根ねがやせぎすの性たちの病院びやういんを出でた時ときよりも一さう細ほつて見みえた。私わたしの目めには先まづ涙なみだがあつた。母ははは私わたしが大きおほくなつたのを何なにより喜よろこんで呉くれた。

「正直まことほ、父ちちさんが一いべんお前まへに逢あひたいんだと云いつておいでだつた。一度いちど家うちへ



お歸り。皆丈夫だし大きくなつたから』と正月と云ふに白い寒さうな工場服の私の姿を、母は涙のこもつた眼で凝つと見た。

『え、一ぺん歸ります』と私は云つたが、遂に家へ歸る暇はなくて私は上京して仕舞つたのである。

『母さん、僕東京へ行かうかと思つてゐますよ』

『さう、矢つぱり出世するには東京でなくてはなりませんか』と、母も心配はしなかつたが、また深くも止めはしなかつた。私の覺悟はいよいよ決まつた。上京心は暮れの十一月末から、講義録で頭の進むに連れて、私の心には芽を吹き出したのであつた。目的は勿論立派な畫の先生に就かうと云ふのである。

十四の年は講義録と首つ引きのうちに、春夏秋冬と流れて、寄宿舎の窓外にはまた銀杏の色づく晩秋が來た。工場服の首筋の寒い日が多くなつた。

思ひ起す十一月の十三日日曜日、私は轉寫工場を暇取つた。退社したいと云

ふことは十月から云ひ出したのであつたが、主任が涙を揮つて止めるので、如何に思つたことは何んでも遂行して仕舞はなければならなかつた私も、一日一日と心にもなく働いたのであつた。けれども私の悲しい性質が承知しなかつた病氣と云ふ名目で目的を達したのである。主任も惜しんで呉れた。會社からは金二十圓の慰勞金が下がつた。工場一同中には泣いて呉れるものもあり、ひどく別れを嘆いた。同仁書院の以外に好きな本を買つたり、著物を一枚でも作つたり、其の殘額は月々すつかり家へ送つてゐたので、貯金は一錢もなかつた寄宿料を差し引いた十三日分の給料に二十圓を合して金二十五圓十三錢、本や雜品は仲の好かつた職友に遣つて、紺がすりの著物と羽織にマントを冠つて烏打帽、荷物と云つては畫の道具を風呂敷に包んだのだけで、丁稚と坊ちゃんをちやんぼんにしたやうな姿の私は、午後一時頃風に吹かれて會社の門を出たのである。一二丁行つて振り返つて見れば、十本に近い大煙突が立つてゐるのを



しみじみと眺めて、彼の下で昨日まで一年餘働いてゐたのであるかと思つては、別離の寂しさに涙もなかつたのであつた。

晝の先生、寫眞館、其他三四の知り合を暇乞ひに歩いてゐるうちに二時を過ぎた。汽車に乗る考へで電車に乗ると、ひよつくら母が乗つて居た。

「母さん何處へ行くんです」と云ひ乍ら氣が付くと、十一月と云ふのに單物ではないか。

「あゝお前、えいところで逢ひました、一寸降りてお呉れ」と云ふので、其の近所の停留場で下りると、母はもう涙ぐんで居る。私の察して居たとほりであつた。夫れは外でもない、父が、取り返さう々々としては段々深みへ陥まつて行くのであつた。夫れで私は家へ歸らなかつたのである。

「お前今日はお休みかへ」

「はあ、日曜です。夫れはさうと母さん、父さんにさう云つて下さい、相場だ

けは生意氣のやうですが、正直が止めて呉れつて言つて居た」と母は質屋からの歸りであつたのである。

母には、東京へ行くなぞとはおくびにも出さずに別れた私は、もう其處からは近かつたので歩いて停車場へ行つた。そして忘れてゐたやうなまたぼんやりしてゐたやうな氣分から覺めた時には、東京へ行く旅費たる可き二十五圓は私の懐中から姿を消してゐたのである。母に逢つた際安心をさせやうと思つて、幾千でもあるんです、と云ふうら悲しい虚榮の態度で、母の手に握らしたのだ。そして十三錢も電車賃が要つたので財布の中には實に十錢銀貨が一つ轉がつて居るばかり。私は大きな溜息をついた。

午飯が胸につまつて一膳しか食へてなかつたので腹が減つて來た。私は焼芋を二錢買つて、明治橋と云つて郊外へ出るところにある、人通りの少ない陸橋の上で夫れを食つた。そして三錢を張り込んで有名な門前町から熱田までのが



た馬車に乗つた。

さらば涙多かりし名古屋の街よ。私は大膽にも金八錢、馬車賃を出して僅か白銅一つで、名古屋から東京までの徒歩旅行を企てたのである。汽車賃が無くなつたからと云つて、閉口たれることの出来るほど、私は賢くはなかつた。心だのみとするところは、一管の畫筆である。

## 十二 出世中毒 上の巻

路金八錢の三分の一強までも拂つて殊更らにがた馬車に乗つたのは、私は行をどこまでも趣味のものにしたかつたからである。悲惨なる趣味だ。また自棄の趣味である。乗合ひは中年男ばかり三人であつた。一人は職人らしい、一人は古道具屋らしい、も一人は田舎者で肥つてゐたが、私は博勞と云つて牛や馬を賣つたり買つたりする人間と思ひたかつた。郷里の小學の一二年生の時分、

よく角の太い牛を赤い布で飾つて、龜山から追つて來たり追つて歸つたりしてゐた男に似たところがあつたからである。兎に角何の面も馬の尻にはひのするがたがたの箱に入れてちやんと落ち付きのある顔であつた。私も似合つたことであらう。こんな四人を乗せた馬は、脊中の骨を叩かれ乍らのそくと走つた。途中で一人乗つたかと思ふと、間もなく今度は博勞のやうな男が降りた。私は惜しいやうな氣がした。

揺られ揺られながらの私の頭の中は、複雑に亂れてゐたことはまたさなかつた。家の過去現在未來、身の過去現在未來、ともにそのうちの一つであつたのは云ふまでもないが、第一に腦に染みてゐたのは其の時分の出世者の名である。畫の方面では尾竹國觀氏であつた。政治家としては河野廣中氏であつた。其のほかまた歴史の上の畫家も政治家もあつた。學者も實業家もあつた。實際私は一發明の爲め一寸名を出した陶器會社での小出世が導火線で極度の出世の中毒患



者となつてゐたのだつた。考へ廻せば自分では趣味だなんて云つてゐるけれど、  
 がた馬車なぞに乗つたのも自分でも思ひ出せぬが誰れか知名出世者の真似であ  
 つたのだ。

河野廣中氏などは中でも一番の憧憬の的だつたのである。氏が志を立てた  
 源は、優しい祖母の口から毎夜のやうに聴かされた支那三國時代の波瀾の多  
 い物語りださうである。夏は蚊帳の中で、秋は雨のやうな蟲聲に繞られ乍ら、  
 また冬から春へかけては雪の茅屋に炬燵を圍んだ祖母の懷ろで夜更くまで聞  
 たものだと言ふ。支那古今の名のある豪傑や英雄やは氏を強度に感化したので  
 ある。そして關羽孔明と云つた智勇を兼ねての將士は殊に崇拜したものだや  
 ら。

關羽は玄德や張飛の連中と牛を喰ひ、桃園の義を結ぶと云ふので大盃を乾し  
 たりした男である。戦争があるごとに八十二斤とかの青龍刀を振り被つたと云

ふ力強さである。關羽にとつて千軍萬馬の中は大道よりも歩きやすかつたので  
 あつた。

孔明は彼の國の楠公であつた。此の稀世な軍略家は三國時代の戦亂に呆れ返  
 つて山奥に避けた。そして刀を釣竿の代りにして自然に親しんだ。まことに傳  
 説のやうな事實である。門下の玄德や關羽張飛達が三度も頭を揃へて頼みに行  
 つたけれども頭を縦には振らなかつた。しかし了ひには斷はるに斷はり限れな  
 くなつて一度山を出ては蜀の爲め身を碎き骨を粉にした。

こんな物語が廣中氏を深く教へた。何の物事の辨へもない幼心に沁み入つ  
 たものは一生忘れない。今日の氏は實にこの勇士の談しで生れたのだ。また氏  
 はワシントンの賢人の部類を通り越した大聖人であるのに心から服した。グラ  
 ヲドストンの大人の質でその道に忠であつたのを見習つた。日本人としては氏  
 は織田信長を心の師とした。三河の桶峽間で大雨沛然の中を夜襲した機敏さが



好きだつたのである。楠正成も氏の心を動かした者の一人であつた。湊川で腹を切つた時朝敵を討つたため七度生れて來ると云つた意氣は起き伏しの間も忘れずに模範にしたものである。廣中氏の幼ないころはまだ寺小屋であつた。男でも女でも先づ孝經や大學を習つた。學問の主眼は夫れを實地に見せることにあつた。夫れであるから此頃の形而下の教育で大きくなつて、形式的の學問を積み込むのに汗だく／＼な書生とは少し違つてゐた。氣概も相當にあれば小勇でもなかつた。氏が十六の時に天下は勤王の聲で警鐘の亂打されるやうな騒ぎになつた。長州征伐は何如許りか當時の若い人の血を沸かせたことであらう。氏は中心點を烈公として徳川の軍と、武田耕雲齋や藤田東湖等の下にゐて何度も戦つた。

數年は夢と經つて、上京した氏はあちこちと浪々した。間もなく戊申の役が起つて、氏は周圍の關係から朝敵の名を蒙らなければならなかつた。氏がは

じめて政黨と云ふものと關係したのは明治七年に板垣副島江藤などの人々が創立した愛國社に這入つた時である。當時の世の中は大變渾沌の状態を極めてゐた。猶根を絶たない幕末の餘弊のあつた爲めに、民心はみんな宙ぶらりて迷つてゐた。其處で現はれたのが民權自由の主張であつた。愛國社は一時中止したが十一年にはまた大阪に社が出来た。十二年には世間の大分に愛國社なり民權自由論なりを認め出し、十三年に上奏を決定して氏の發案で自由黨と云ふものが創立された。世の人々は自由黨の創立者は板垣伯ださばかり思つてゐるけれど實際は氏が創めたものだ。板垣伯は黨が出来た翌年總理に迎へ入れられた人である。また氏は十五年から二十二年の憲法發布までの八年を牢獄に送つた。實に七轉び八起きの氏の今日ではないか。

逆境の中で大きくなつた私は、氏の歴史に共鳴せずには居られなかつたのである。氏は眠れるの痛快兒である。起きれば必ず日比谷原頭に白刃のやう



な熱辯を揮つて、凡俗の天下を戦かさすにはおかぬ。痛快劇の主人公には何時も氏が推される。男性的ではないか、私は其處にも心を惹かされた。今一つ忘れることが出来ぬのは、何度か聞いた氏の演説のうちの次ぎのやうな一節である。我れを忘れて耳に入れたので、今だに凡そは諳じてゐる。夫れは題は何と云つたか知らぬけれど、出世の語源に就てのことであつた。

大人の出世と小人の出世と言ふことで考へて見ると、同じ出世のうちでも、佛典で謂ふところの大人と小人との區別があるやうに思つてはならない。小人の出世の方をわかりよく一言葉で云うて見ると、つまり自分本位で他人はどうなつてもよい、唯自分だけが満足したら夫れでいゝと云ふ遣方である。もつとも小人と云つても相當な修業はするであらうし、難業苦行の境涯を通つてやうやくのことで實世間へ出て働くものもまたあらう。けれどその結び目のところを考へて見ると一から十まで自分の好いようにとばかりである。自分を持ち上げ

る考へから費やしたばかりの勢力である。これに較べて大人の胸中には稱聞の別天地があるのだ。其處に小人と大人との同じやうにはすることのできない大きな溝が生れ出るのである。

亡くなつた江藤がこの事に就いてこんなことを云つて来たことがある。『小人でも大人でも勉強するのに變りはないぢやないか、石の上にも三年だ、人氣のない山の奥へ這入つて自適従容むかしの蒼仙を學んで悟りを開けば、小人であらうと大人であらうと、悟つた人に相違ないから』との意味のことであつた。

すると居合した副島が『小人大人の區別は第一道を修める時の心掛けからあるのだ。同じ悟りに二様はないやうだけれど、深く底へ立ち入つて考へて見ると實際は悟りにもいろ／＼ある。で實世間へ出て来てからでも小人の悟つたのと大人の悟つたのとが何處までも違つてゐるのはあたりまへだと云へもするのだ』大人の出世は風だし、小人の出世は夫れになびく草である』と我輩の前に言つ



たやうなことを並べ立てたので、江藤も夫れもさうだと云つた。  
我輩は出世に就いて始終こんな考へを持つてゐる。それで世間のものが云つ  
てる。謂ふところ出世者も我輩には何の意味も持ち來しはしない。金力出世でも  
つまらない。それかと謂つてどれほど修養をしたところでそれが自分の爲めを  
考へるからの修養では出世でもなんでもない。修養したら其の力で社習のもの  
を導いてこそ大人の出世である。

昔の人は修養するのに山の深いところへ入り込んで溪川の潺々たるを友とし  
た。そして薄暗い静な行燈の影で瞑想した。けれども今日はそんなことをしな  
くてもいくらでも修養が積める。夫れは人々の氣の持ち方一つであるのだ。兎  
に角我輩の抱いてる出世の意味はみな佛典に根ざしをしたものと言ひたい。  
夫れにつけては政治家の出世のことである。政治屋の出世と謂へばまあ政權  
を握つて抱負を洗ひざらひさらけ出し自分勝手のことが出来れば夫れで世間は

出世だと言ふ、しかしどれほど政權を自由にしても意見を遂行しても世間の上  
を心配しなかつたらこれも小人の出世である、そんな目で今の政海を見廻すと  
大人の出世者は一人もありはしない。情ないではないか。また政界の墮落を心  
から嘆かすには居られない。機運を捉へることが出来たら天下に思ふ存分のこ  
とをして自分の思想を廣く世間に訊きたいとは、我輩の片時も忘れることの出  
來ぬものゝ一つである。

廣中氏はいつでも大きな仕事をする人であり、大きな仕事を考へてゐる人  
もある。また私の思ひの象徴者であつたところでもある。

### 十三 出世中毒 中の巻

馬車に別れて熱田の町を離れると、大半刈られた田には深い秋の氣が立ち罩  
めてゐた。二里ほど歩いて、下駄を捨てた私は懷中から一足の古足袋を出して



二重の足袋洗足ですたく急いだ。夜が迫つて来たのは刈谷の手前であつた。刈谷は其の頃放火が頻りにあつて其の犯人が揚がらないので、見知らぬ人間だと見ると敵を見付けたやうな様子をした。私はお寺へ出掛けて行つて泊めて呉れと云つたのであるが、寺男が裸で二錢銅貨を一つ握らしたいで冷めたく追拂はうとした。私にも弱々しい乍らも抗撥の心があつた。無理に持たされた銅貨を寺男の薄暗い足下へ叩き付けて其の心を出して見せた、「こんな汚ない寺で泊まつて呉れと頼まれても誰れが泊まつてやるものか」と私は一町はご来てから寺の方を睨んだ。この夜を私は松並木を便りにして東へ々と歩き明したのであつた。夜の明け方に今は市になつた岡崎町へ這入つた。岡崎には矢矧橋がある。私は白亜塗りの鐵筋が思ふに異つたバタ臭さいのに失望したけれど、まだ一つ二つ消え残つた星を浮かして廣い砂原の中を細くなつたり太つたりして流れてゐる澄んだ川瀬の音は、木下藤吉郎がその橋の上に席を著て寝て聴いた昔

と同じであらうと思はれた。たはむれではない私は人通りのないのを見澄ましてマントのまゝ一寸横になつてさへ見たのであつた。今になつてそのときの心の中を考へると脊中に冷汗が流れる、藤吉郎の出世もその時分私の患らつた出世中毒の源の一つである。私は十二三の時分には豊公の傳記は一番好んで讀んだ、山路愛山氏の豊公出世説などはことに愛したものである。出世と謂へば私は豊公の出世は日本での筆頭にしなければならぬ。其の徑路と云ひその舞臺と云ひ事業や範圍と云ひ、實に歴史上獨歩の壯觀ではないか。けれどもそれかと云つてこれを稀有で人間業ではないと驚くには及ばない。豊公の出世は其のころの時世としては當り前とまでは云はれないが珍らしがるわけもないのだ。そのころは戰國時代であつた、社會の階級と云ふものが散々になつてゐて一寸器量のあるものは思ふやうな働きが出来た。實際支那で云ふと『盜賊王と化す』これぐらゐは日本にもあつたのである。當時各國に割據してゐ



た大將では大概昔から引き續いての家柄ぢやなくてドサクサ紛れに成り上つたのであつた。

このドサクサ紛れの成り上り者の中でも豊公が偉かつたから天下を取つたに過ぎないのである。兎に角彼れは矢矧の橋の上で寝た子供の時分から利巧だつたけれども、彼れも生れ故郷を飛び出さなかつたなら村長ぐらゐが止まりであつたであらう。別に深い考へもなく飛び出したのが運を生んだのである。彼れが信長の草履取りになつた時分の彼れの考へが知りた。しかし夫れは誰れも知る由もないことであるが、何にしても一生懸命に奉公された、其の爲め信長に目を掛けられ立身を早めたのであつた。後の彼れの細心もその頃から芽生へした。凡人でない彼れは少しづつ飛び超えて出世したいと考へた。

彼れは使はれ上手な男であつた。同じ人に同じやうに使はれるくらゐなら上手に氣合よく使はれて、使ふ方の人に好い感じを與へるのが徳だと考へたので

あつた。彼れの勤め振りは夫れだから殊勝で美しかつた。主人が亦た天下の才子である。家來が馬鹿か賢いかの見別けの附かぬやうな人間ではなかつた。彼れの使はれ振りを見て段々と引上げたのであつた。彼れは此の調子で木下藤吉郎から羽柴筑前まで昇つた。彼れはかう云ふ風にすれば使ふものは屹度喜ぶとチャンと手の内にコツを呑み込んだ。人を使ふのには先づ使はれて見ないとほんどうの味はわからない。後年彼れが天下の群雄を顎の先一つで宜く使つて行けたのも全く使はれた經驗があつたからであつた。彼れは羽柴筑前守までは一の奉公人であつたが、本能寺の騒ぎから一足飛びに信長の跡目相續になつた。そして奉公人として成功した彼れは、信長の相續人としても成功した天下の豊公となつてからも成功した。

十四 出世中毒 下の卷



考へれば考へるほど彼れは善い主人を持つた。彼れが主取りをするのに若し  
信長でない人に奉公したら決して天下は取れなかつたのだ。私はいつでも運は  
偶然だと思はずには居られない、第一に彼れが恰度尾張へ生れてそして信長に  
従つたのが大なる運であつた。其の主の信長はまるきり彼れに譲り渡すため奮  
闘したのであつた。そして本能寺に斃れた。彼れが何れほど天下が愆しいと云  
つたところで信長が長く此の世に生きて居たら取れる譯のものではない。無理  
にとればそれこそ謀叛である。先づ足利尊氏と云つた格でなければならなくな  
る。

その信長を光秀が殺して呉れたとは、幸運もこゝに至ると氣味の悪いほどで  
はないか、彼れはそこで山陽遠征の陣は毛利と話を付けて了つて、柴田勝家な  
ぞと云ふ重臣が歸らないうちに取つて返したのも幸運であつた。毛利が頑張つ  
て附け廻したら何うしたであらう。夫れから信長恩顧の重臣を代表して自分一

人弔合戦をして勝つたのもまたとん／＼拍子の幸運であつた。けれども其幸運  
うまく乗つた彼れの呼吸は何と云つても天下取りの器量があつたればこそ出来  
にた藝であつた。彼れはまた萬事遺り方も信長から得たものが多かつた。それ  
で豊公として獨立してからもすること成すこと信長に似たことが多かつた。信  
長に斯んなことがあつた。北陸道へ遠征してゐた勝家に手紙を送つた。『家來を  
使ふには、家來が働きさへすれば主人に手柄になり従つていくらでも褒美を呉  
れると思はせて置くのが一番である。殊に遠くへ出征中などはこの心持ちを失  
つては不可ない、また貰へる／＼と思ふと、人情は妙なもの疲れて居ても一生  
懸命に働く。それだから手元にはいくらかの金を切らさないやうにして置かな  
ければ駄目だ』とは隠れのない逸話である。信長の筆法は何でもこの式であつた  
平生は大變に儉約してゐ乍ら、賞金など云ふ時には出来るだけ大仰に惜しま  
ずにバラ／＼と出した、これは信長自身の廣告にもなり、一方貰ふ方でも大仰



なだけ面目を施こす譯であつた。信長は生きた金を使ふ男であつた。

秀吉は此れを横手から見ではちやんと呑み込んだ、信長が死んでから、彼れは始終戦争に勝つて、中々澤山な金を懐中にしたが直ぐまた功のあつたものに別けて了つたものだ。また彼れが家臣に頻りと大碌を遣つたことは有名で、廣告として人心收攬としてこの上もないことである。彼れが活躍した戦國時代から戦國後の過渡時代には、戦争も金、恩賞も金であつた。夫れで信長も秀吉も一方では随分撒き散らし乍らもまた一方では儉約をした。私は歴史を讀んでいつでも感じさせられるのは『出世しやうと思ふ者は廣告術と儉約心を持つてなければならぬ』と云ふことである。武田信玄は甲州の山から金鑛を掘つて軍資にした。徳川家康はシワン坊であつた。其の金を蓄めるのに専心であつたことはお話になつたものではない。知行も惜しんだ、家臣の手柄者には奉書自筆の感状で誤魔化した。有名な話だが古袋足の洗濯したのを藏つて置いて、奥女

中の働き振りの宜かつた者に褒美にしたなどは滑稽と思はずには居られない。其の時分必要に驅られた溜め込み主義は深く諸侯の頭にあつた。秀吉が大きな経済的の腕を持つてゐて、いつでも大金を藏つて置いて何んな時でも其の方では心配の無いやうにして置いたのも、彼れが大きな仕事を成し遂げ得た一つの原因であつた。夫れと云ふのが金は原動力、諸侯を操縦する何よりの薬であつた。彼れの金の溜め方使ひ方の上手であつたことは實際驚かされる、彼れは元來儉約家である。夫れだのに表向きでは大いに使ふやうに見せ掛けた、又た事實のところ大分使ひもした。それをどこでどうして取つて來てあつたものか其の餘生を種々な演劇的に送られたのは、財政が裕であつたからである。世の中には使つて残したと云ふ連中がある。彼れは其の中の一人であつた。家康のやうに右足袋まで利用しては残るに極つてゐる、けれども夫れほどまでにして残さなければならぬ金では決してない。廻りものだもの使つて残つたら殘すに



止めたい。秀吉のやうに一代を養澤三昧で暮して、その上死んだから大阪表の夏と冬と兩度の籠城が平氣で出来たほど残して置いたのは真に偉いではないか使つて残すのは大きな經濟家でなければならぬ。

こゝで一寸考へたいのは、秀吉と云ふ男は果していつごろから天下を取らうなぞと云ふ考へを持ち出したであらうかと云ふことである。信長も戰國の群雄中では圖抜けた男であつた、そして随分と大きなことも云ひもし思ひもし又たしもしたけれど、天下を統一しやうと云ふ大それた量見を起したのは中年の頃であつた。永祿の十一年足利義昭に泣き込まれて京都へ這入つた時はじめて野望を抱き初めたものらしい。私は秀吉も或ひは其の時分から運よくばと云ふ大事を腹に持つてゐたやうにも思へる。けれども死人に口はないし、何の證據もないのだから判らない、たゞ弟子は師に習ひ。家來は主人に教へられるのだから、と推量するのである。秀吉が信長に言ひ付けられて中國征伐に出掛けると

きのことであつた。『我が君は乞ふ日本六十餘州に號令を發し給ふべし、秀吉は君の爲めに死せんことを希ふ、君天下のことを遂げ給ふの後、秀吉は御暇頂戴仕つて海を渡りて大明を攻め取り然る後四百餘州を君に献上仕つて秀吉之れが守護職たらん』と信長に云つた。信長は『面白きことを申す男かな』と笑つた。この時の秀吉の言ひ分から考へると、この時分はもう大望を持つてゐたのに違ひない。

次ぎは同じ一世を動かす出世でも時代に依つて違ふことである、天下が絲のやうになつて朝晩兵馬の騒ぎが絶えなかつた時であつたればこそ豊公の大事業は成功した、彼れの時分に文學で一世を動かさうとは、たとへどんな天才を持つて生れて來てゐても出来ない相談であつた。天下のよく治つてゐる時に、豊公のやうな仕事をしやうと云ふのも無理である。由井正雪ほどの才人でも出来損つて切腹した。何にしても時代を見なければならぬ。出世は運である、運



に逆つては何一つ出来やしない、徳川時代にはどうしても天下は取れないものに相場が極まつた、けれども濱の眞砂は盡きても英雄の種は盡きなんだ、中にも新井白石、荻生徂徠の二人などは不世出の偉材であつた、けれども時が時とて變つたことは出来ず二人とも學問の道に這入つて、二人ともとうとう一世を動かすことが出来た。如何に白石や徂徠が偉くても將軍や大名には頭が上になかつた、しかし兎に角二人は一世を動かした成功者であり出世者には違ひなかつた。白石の仕事、徂徠の事業は不朽である。今の日本には三井や岩崎やの大富豪も多い、けれども歴史は繰り返す。三井でも岩崎でもきつと滅亡する時は来る。そして其の後七十五日が過ぎれば人の口の端にも上せられなくなつて仕舞ふのである。白石徂徠の名は其の時が來てもまだ朽ちはしない。

さてそれでは此の頃の大出世とは何であらうか、先づ金持になることになつた、明治維新の後天下の秩序はすつかり恢復した。勿論天下は取れない、白石

や徂徠のやうに學問でも宜いやうなものではあるけれど、英雄の大出世としては何となく物足りない、其處で争つて金持ちにならうと努力するものが多くなつたのであらう。

内閣の組織も大出世のやうではあるが私はさうは考へない。世の中のなんでもなにごとでも金さへ出せば動く、たい獨り動かないのは金ばかりであると思ふ。世に代表的勢力と云ふものがある、これを昔から今日までに大別して三つとした。其の一は人間を多くさん有つてゐることを勢力にした。人口が稀薄で土地の廣漠としてゐた時分には、土地なんかは慾しいほどぞれだけでも取れた。其の代りに一向何んにもならなかつた。人は數が少なかつたから需要されるものが盛んであつた。事業をするのでも何に就けても人間を集めなければならなかつた。それだから人間が仕事の代表的勢力であつた。其の二は土地である。次第に人間が殖えたものであるから、土地が不足した、土地の需要が盛



んになつて事業の必要條件になつた。其處で土地が人に取つて替つて代表的の勢力になつた。其の三は金である。近頃のあはたしい文明の開化に伴れて商工業が起つた、土地必らずしも尊からずとなつた。殊に商工業は何んでも金で代表することが出来るので、金の勢力が次第に増した。そして絶對的の勢力になつた。これが近ごろのことである、現代のことである、一世を動かさうと思ふ英雄連中が金に走るのは、さうなるはずの成行きである。

### 十五 濱名湖畔に病む

重商主義ではあるけれど、岡崎の町の何處やらに古典的な氣分が流れてゐることは、旅がらすの私の目にも見えた。私は先づ斯う御上手を云つて置いて、前日に晝御飯を食つてからは、焼芋を噛ちつたゞいで休み續けてゐる口を濡らすことを考へなければならなかつた。十二時間の間を働かし續けてゐる足を

休めることを心配しなければならなかつた。私は心から疲れ切つてゐた。熱田から刈谷まで、刈谷から岡崎まで、十四の子供の二本の足で一氣に通らすべく余りに遠かつたではないか。刈谷で侮辱されてこの夜は歩くのを宿のかはりにしやうと考へを決めてからでも、悲しい哉くたびれると云ふことを知つてゐる人間の身の、我れ知らず此の家なら一晩泊めて呉れるかも知れんと、何度とりどめもないことを考へたか知れなかつた。刈谷から東へもまだ暫らくは宵だつたので、或る部落の駄菓子屋には十人近い若い衆が焚火をかこんでがや／＼笑つてゐた。私はそこへもずか／＼這入つていつた。判り切つた道を聴いたりした、二三枚書いてあつた丹冊を出して、問はれもしないのに、私は旅畫師ですと云つたりした。そしてまた其の丹冊を呉れと云はれもしないのに上げませうと云つて無理に菓子屋のお婆さんに渡したりした。

「晝かきさん今晚一晩泊まつて行きなしたらどうです」と云ふて呉れるかと思



つたからである。それもこれも無駄なことであつた。私が子供なものだから、見も知りもしないのに私の前で娘の品定めや聞いて居られないやうな淫墮なことを口々に云つてゐた若い衆等も、一人二人と一時間の後には一人も居なくなつて了つた。焚火も消えかゝつた。私も尻を落ち附けてゐるわけには行かない。また歩かなければならなかつた。二町ほど来てから後を向いて見ると、其の駄菓子屋はお婆さんが戸を閉めてゐた。斯うして世間はだん／＼寢て行つて、夜はだん／＼更けていつた。時たま明りが照してゐる家があると、私はよく知つてゐる松並木の一本しかない道を『東京の方へ行くにはどう行くんですか』ときつと尋ねるのであつた。子供が可愛さうに一人でこんな夜中を東京へ行くので迷つてゐるかと思つて呉れてまた泊まつてゆけと言ふ親切な家もあるかも知れぬのはかない努力であつたけれども世間は如何に子供だと云つても素性も知れないものを夜々中に呼び込むほど暇ではなかつた。ことにとりいれ

どきであるものを。また一時二時のころになると私はなんとも云へぬほど道が怖かつた。

四ツ谷怪談のお岩が出る、鍋島騷動の猫婆が行燈の油を嘗める影が出る、ろく／＼首の女が出る、佐倉宗五郎が出る、太い太つた大蛇が松の木にゐる、講談や小説で逢うてゐた化物は皆私のまぼろしとなつて前へ立ちはだかるのであつた。人一倍神経の強い私は一度談んだもの、一度見た口繪はすつかり覚えてゐた。私は慄へ乍ら歩いた。また狐火は實際に山間に見えた。狸も本物が鳴いた。山の中から月が昇つたと思つてゐると、夫れはほんとうの火の玉で長い／＼光芒を曳きながら天を走つた。其の夜は夜明け近くでなければ月が出なかつた。満天の星はびく／＼してゐる私をおどし付けるやうに流れた。其れでも私はこの徒歩旅行を後悔はしなかつた。何と云ふ不幸な負け惜しみを持つて生れた私ではあることだらう。刈谷から岡崎までに二三人しか人には出逢はなかつた。



淋しい夜道で人に逢ふくらゐ恐ろしいものはまたとない。ことに一番最後に行き合つた三十位の女の乞食には、首を絞められたやうな恐怖を覺えぬことが出来なかつた。

極度に疲勞した私は五錢あつたので饅頭を食い、やつとのことで岡崎の月照山の寺で救はれた。和尚は私の身の上を聞いて呉れて、大變同情してくれた。朝飯を饗はれて晝も夜も饗はれて風呂も貰つて泊めてもらつた。私は明るる日は中食の辨當まで持たして呉れる親身も及ばぬ和尚の姿に心の中で手を合した。そして半切山水の畫仙紙を一枚書いて、月照山を出たのであつた。この日は晝御飯の心配はなかつたが、午後三時ごろから傘もないのに雨に降られて歩かねければならなかつた。夜になつても第二の月照山も見付けることは出来なかつた。

月照山を辭してから四日目の夕方、私の目の前には漣の濱名湖が展けた。

濱名湖までの三日三夜は雨の洩る木の蔭で野宿をしたり、刈穂の積んだ上で寝たり、木賃宿で一夜を明したりした。まるで乞食も同様に頭を下げて宿々の寺で繪を描かせて貰つた。その賃で大福餅を噛んだり芋を食つたりして通したのである。もう刈谷で二錢銅貨を放り出したやうな元氣は薬にしたくもなかつた。烏打帽子は雨に打たれたので南瓜のやうになり、著物からマントから泥まみれであつた。二重の足袋も、底は切り抜いたやうに無くなつて、むき出しで歩くのと足の痛さは少しも違はなかつた。湖は入日を受けて紅く染まつた。水の上を晩鐘がわたる、私は湖畔に疲れた足を投げ出して、膝に頬をくつつけて眼を閉ぢ乍ら其の鐘の響を聞いた。野に働いてゐた人は家路にいそぐ、強情な私も、遂に其のうしろ姿を羨んだのであつた。

たうとく若きわがいのち



いとほざらめや朽ちゆくを  
あゝ淵深く身をいごむ  
せんすべもなき死神や

いとけなき日に父を見ず  
病む母目にも見ゆるかな

あゝ聲もなく魅力ある  
氣まぐれものゝ死神や

乳の母にも思ひあり  
はらからもまた思ひあり

あゝ名も艶めく辨天は

すがた疑らせし死神や

辨天島に何んの火かぼつちりと一つだけ灯が点いた。私は其の方を凝視め乍ら今だに忘れぬ斯んな歌を歌つた。氣が付くともう四邊は暗くなつてゐた。筒袖の著物の私の懐中には手頃の石が一杯這入つた。死神と云ふことをよく知つて歌まで作りながら私はふら／＼と死神に誘はれたのであつた。『では僕は死ぬんだ』と誰れに云ふともなく吐やいてからはもう夢中であつた。そしてしたゝか水を飲んで苦しくなつた刹那に十間ほど先の岸を自分の方へ走つて來る人影がチラと見えたが、其れからはまた何も目には映らなくなつてしまつた。

我れに返つた時には、飛び込むまで足を投げ出して休んでゐた草の上で、私は二人の男の人に世話をされてゐた。『もう一寸後れたら不可だつたづらよ』と一人は私のマントの水を絞り乍ら、もう一人にむき出した遠州辯で云つた。『あゝ』と其れに答へながら『まだ坊んのやうだがね、一体どうしたんだづら』と



云ふ方が私を助けたのらしい、着物はもう着てゐたが、顔が水だらけだった。助けて呉れた方はまた言つた「坊うまあ宜かつた」そして自分の羽織を私に著せた、私はしく／＼と泣くばかりであつた。

私は命の親の家へ連れて行かれた。大鹿辰造氏と云つてつい近くの舞坂の人であつた。大鹿氏は米問屋の主人公で忙がしい時であつたが出来る限りの世話をして下さつた。問はれるまゝに何から何まで打明けた私の不幸な月日はひびく大鹿氏一家の情を惹いた。殊に同家の長女玉枝さんは疲れと風邪とで六日間病ひの床に居た私の薬や食事の世話をし乍ら、私の逆境に紅涙の袖を絞つて呉れた。私は一生の大椿事、死の救ひ主大鹿氏の家庭で、また一つ一生の大椿事、戀に始めて酔うた。

玉枝さんは十七、十四で三つも年下の一少年であつたが、總てに早熟なこと人間並でなかつた私は、意外なところで初恋に目覺めたのであつた。意外と云

へば、私の水死未遂の一件も實に自分乍ら意外であつた。後から考へて見ると飛び込んだところは大變深かつたので泳ぎを知らないところへマントを冠つた儘であつたから、苦もなく一氣に沈んだ、そして一寸浮き上つた時に大鹿氏の駆けて来る姿をチラと見たのであつたらしい、亦直ぐ氣を失つて、沈んだところをぢきに救はれたのであつた。水は黴ししか呑んで居なかつたさうである。兎に角私は思ふ、毎日の新聞に載つて来る情死だとか自殺だなどと云ふのにも、私のやうな都合具合で死んで了ふものはあらうと、私も飛び込んだまゝ死んだのであつたら、其の明日の新聞には、家庭の不和が原因であつたのだなんと書き立てられるところであつた。また同時に實際意外だつたのは私の戀である、二人の戀は私が同家へ行つた四日目の日から、一日と熱烈になつた。私が病ひの床を出てからは二人は湖岸を連れ立つて歩いた。戀人に墨をすつて貰つて私は宜く繪を書いた、繪を書くほか私は長談をやる、發句をやる、和歌も遣



つた。湖畔で随分收穫した夫れが女學校三年まで行つて文學に耽つてゐた美しい玉枝さんには氣に入つたらしかつた。投身してから十日は夢に消えて、戀を語る二人に取つて一刻は實に千金であつた。けれども私は上京の希望がある明日こそは立たうと大決心で十一日目の晩に夫れを戀人に打開けると只だひた泣きに泣いた。大鹿氏一家の人も明日は御暇させていたいくからと云ふと、これも大變別れを悲しんで下さつた。娘と私との間は年が違ふのでどうして居やうと怪しまれなかつたらしい。帽子と洋傘と足袋と下駄、是れだけを新らしいので買って貰つた、もつとも最初は汽車賃も上げやうと云はれたのだが、私の性質もあり、その時は尙戀人の手前もあつて一文も要りませんと固く断はつた。戀人は「瀧口入道」をかたみに呉れて、著いたら直ぐ手紙を下さいと云つた。私は半切に戀人の湖畔の立ち姿を描いて、

「もだし勝ちなる瀧名湖の

むねの思ひを誰れか知る  
さみしくもかく底唱しつ

さいなみ岸を幾彷徨ひ

と自讃をした、瀧口入道を呉れた心も多情であつたらうけれど、此の畫を贈つた心も實に多恨であつた。大鹿氏には種々な繪の外に、丹冊へ、

「命あつてもものだねなりし十日哉」と思ひ萬斛の一句をものして贈つたのであつた。此の方の趣味の無い氏は深く解しはされなかつたらしいが、兎に角芭蕉の血筋の者が書いたと云ふので喜ばれた。玉枝さん一人だけ村端れまで送つて呉れた。

「お手紙下さい、さつと、あたし『死神』や『瀧名湖』や、それからあなたのお作りになつた歌を毎日みんな歌つて待つてゐますわ」これが戀人の最後の言葉であつた。



「君假りにわれよりの男の思ふあり、戀わたられなば如何にし給ふ。では御氣嫌宜しう」と私も別れを告げた。戀人は互ひの姿の見えなくなるまで一寸も見送つてゐた。私は東京へ著くや第一番に彼の女のところへ手紙を出した、猛烈な手紙の交換が三月ほど続いた。彼の女は「あたしは、いつまで『濱名湖』の歌を歌つてゐなければならぬのでせう、此の頃ではあなたのお詩が十七ありますわね、夫れを皆讀記してしまつてよ、それなのにあなたには一度も逢へないんですもの」なぞとも云つて來た。すると間もなく彼の女は十八の櫻咲く頃父に無理に迫られ結婚をすると云ふ手紙を寄來して、夫れ切りになつて了つた。私は大鹿氏の許へは毎年年始狀を出し、また大正四年には四年振りで訪ふたが、彼の女のことは大鹿氏も何も云ひ出されず、また私も尋ねる勇氣もなくて嫁入つた先も知らない。

兎に角、濱名湖畔の十日余は、實に私に取つて思ひ出の深い日と云ふもので

あつた。こゝに書いた以外に當時の詩や句は澤山私のノートに残つてゐる。其の後五年の月日は去つて、今ではタイプの古いものとなつて了つたけれど、記念すべき作品として、暇があれば一冊にまとめたいと思つてゐる。また、濱名湖畔の出來事は、まだ一人の友人先輩にも一片だも打ち開けてない。此の書を手にとつて松尾君は自殺未遂の経験があるのか、とおどろく夫れ等の人々の顔付きを想像しては、私は實に無量の感に打たれる。

## 十六 東京の眞中で野宿

ダゴールも眞に迫つて云つた。

「旅人は已が宿りを求めんが爲め、未だ見ぬ人の戸を叩かざる可からず、人は最深の宮殿に詣でんが爲めには外部の全世界をさまよはざるべからず」實に永い旅はつらいものである、況してや第一に先立つ金を持つてゐない私の旅はま



こと 悲惨を極めた。十一月の十三日に中京を辭してより恰度一月目、十二月十四日に私は函嶺の絶頂に立つて激しい吹雪に悩んだ。樂な宜い道があることは教はつて知つてゐたのであつたけれど、私は半乞食半畫師の苦しい旅にまつたく自暴となつて居た。なるやうになれと云ふ氣だつたのである。品川へ這入つたのは二十五日の夕方であつた、この日は天氣は日本晴れであつたが、風が笛を吹く寒さに空腹な身体は手一木足一本と離ればなれになつて散つて了ふかと思はれた。新橋を渡つたのは電車の停留場の時計を見たのでちやんと知つてゐる、全じ日の夜の十時十五分であつた。これが銀座だと聞いて、小學の三年頃の教科書で讀んでから憶れてゐた本物の街路を歩いて居るにしても、絢爛に目を奪はれる可く、私は餘りと云へば悄衰してゐた。もう其の時には賣つてしまつてマントも羽織も著て居なかつた、帽子も足袋も付けて居らなんだ、緋だか無地だか譯がわからないほど汚れた袴一枚、其の下に眞黒になつたシャツ一

枚、夫れを結んだのが新メリンスのポロ／＼になつた帯、舞坂で大鹿氏に惠まれた日和下駄が齒が無くなつた許りか臺まで減つて草履のやうになつたのを履いて居るだけ、夫れに猿股を合して都合五點、空の財布さへ落して持つては居なかつた。只だの二錢銅貨三つを手裸のまゝ握つてゐる、夫れは品川の町で畫の道具一さいを風呂敷まで添へて十五錢で賣つた残りである。

私は其の夜捕はれて籠の中へ放り込まれた小鳥が、暫らくばた／＼暴れるやうな氣分とも何とも名狀し難い感じに壓せられて、二三時間と云ふものは行き當りバツタリで市中を歩き廻つたのであつた。最初尾張町のところから左りへ折れたまでは覺えてゐるが、あとは何處をどううろついたやら見當が付かない。兎に角帝劇の前へも出たし、ずつと反對の江戸川の電車の終點のところへも一度はたしかに立つたことは覺えてゐる。そして日本橋の上へ電車も通らなくなつた一時時分にひよつくら出て來た。橋の袂に居た鮎を四つ食つて二錢銅貨二



つを無くした。また少しの間歩いて行き當つたのが、私をして、何時々々まで  
も「悲しい因縁」の嘆を禁せざらしめたよろひ橋の上である。當つた風の方が  
寒がるほど冷え切つてゐた身体は、風の強い橋の真中に平氣で立つて、し  
ばらく流れを見下してゐた。下圖氣が付くと恐ろしいではないか、巡査が抜劔  
して振りかざし乍ら私の方に向つて走つて来る、私は我れ知らず大きな聲を立  
てた。すると巡査の方もぎよつとしたと云ふ風で大變あはて、劔を鞘に收めて  
から、矢張り恐さうに私に近付いたが、子供だと見ると、急に威嚴を正して、  
「コラッ」と云つた。私は橋の上で其の巡査から嚴しい訊問を受けた、で仕方な  
く東海道を無錢で遣つて来て今夜東京へ入り込んだばかりであるが、金が無い  
ので困つてるところである、と云ふ意味のことを大略述べた。忽ち巡査は御機  
嫌は直つて、「寒い喃」と獨り言のやうに私に言つた私は其の巡査と仲好しにな  
つて仕舞つた。「巡査さん刀なんぞ抜いて、僕はびつくりしましたよ」と云つて

遣ると、苦笑ひをした巡査は「彼れは寒いからさア、」と笑つてゐる。悲惨  
は何處にもあつた。交番所もない海岸で見張りをさせられてゐた彼れは、寒さ  
に堪まらなくなつたので、劔まで抜いて暴れなければならなかつた。哀れな弱  
者の大自然と運命とに對する反抗の一つと云はねばならぬ。  
「巡査さん、僕朝にさへなつたら何うにかなるんですが、今晚だけ寝られるや  
うなところは此の近くにないんでせうか」巡査も巡査なら私も私だ、勝手なこと  
を言つてる。「寝るとこか、待てよ、おゝこゝなら風が来なくて宜いわい」巡査  
の立つ場の後のところに晝の間は車の帳場があつて、車夫が火を焚いて當るこ  
ころらしい四尺四方ぐらゐの小屋がある。其の中は灰だらけで這入れても寝ら  
れないが、小屋を風の盾にして巡査も手傳つて呉れ寢床を拵らへたのであつた。  
寢床と言ふと可笑しい、夫れは其の近所に家の改築をしてゐるのがあつたので  
其處から戸を二枚持ち出して来て一枚を小屋に引つ附けて敷き、一枚を立て掛



けた、これで冬に人間の寝る寢床である。

「どうぢや、宜えぢやらう、俺も寝たいなア」と、這ひ込んだ私の頭を軽く叩き乍ら巡査は笑つた。

「コラ、上官がお休みになるのに喧ましいぢやないか」と私も身體を縮め乍らおどけて見せた。

## 十七 新聞配達

目が覺めると、例の巡査が起して呉れたのであつた。「オイ、夜が明けたぞ、夜が明けたぞ、アハ、面白い奴ぢやないか君」と何時の間に来たか、もう一人の巡査と顔を見合せて笑つてゐる。「ハ有難うございました」と起きた私は二枚の戸を前にあつたところへ置いて来た。「實際有難う、巡査さん、近いうちに禮に来ますから名前を聞かして下さい」ナニ俺か、俺は高田ちゆうんぢや」

と彼れはまた哄笑した。其の笑ひ顔を見た私の目へ、白刃のやうに映つたものがある。「東京株式取引所」の七字であつた。私が野宿をしたところから三間と離れてゐないところにあつた白塗の西洋建は株の本場であつたのである。

「こゝは株式のところですね」

「あゝ」

「さうするとこの橋の向ふは米の市場があるんですね」と云ふ私は彌穀町と兜町とが向ひ合せにあることは名古屋に居た時分から知つてゐたのであつた。

「あゝ」と巡査はあゝ計り云つてゐるが、私の心中は夫れどころの騒ぎではなかつた。つか／＼と會社の直ぐ前のところまで行つて思はず拳を握つた。橋を渡つて米穀の方の會社の前へ立つては、また涙を呑んだ。遠く伊勢や尾張の空で株と米の爲めにしひたげられた子は東京へ著いた其の夜を偶然にも株と米との會社に挟まれて野宿をしたのであつた。私はこの時ぐらゐ堪へ難い思ひのした



ことはなかつた。  
 一夜握り締めて寝た一つの二銭銅貨は、人形町通りで新聞を一枚買つて半分にした。労働の口を見付ける爲めであつた。其の新聞の廣告に依つて私は淺草區北清島町に下谷淺草合同新聞店中部の店を尋ねた。そしてあたりまへならば保證金を二圓收めなければならぬところであつたのを、大いに説いて月給たゞの八圓也で遂に採用されることになつた。

先づ配達人に使はれることになつたから兎も角口は出来たが。配達に出るにはゴム足袋が要る。夫れから絆布は貸して貰へたがツボン下が無ければならぬ。そこで一枚切りの著物を屑屋に二十銭で賣り拂つて、入谷の夜店で十二銭の古のゴム足袋と三銭の古ツボン下を買つた。食事は一回六銭五厘の辨當を三度々々取るのであるが、此れは月給で差し引かれるのだから差し當つてもう金は要らなかつた。さて今度は配達する區域と得意とを覚えなければならぬ

私は東京へ著いて翌々日の朝から愈々先づ新聞を折り疊むことを習ひ、替る前の人の後に尾いて區域を歩くことになつた。巡路帳と云つて、何と云ふ家は何新聞、とちやんと書いた帳面を持つて夫れに、何の家からはどちらへ曲つたなご、云ふことを自分で覚え書きして歩かなければならなかつた。ところが最初尾いた朝は、しよぼくみぞれが降つてゐて、手がかぎなんでも鉛筆など持つて書けなかつた。其の上教へて呉れる人はどしどし配達して走るのだから堪まらない。私は尾いて歩くのだけがやつとこさで、はじめからをはりまでの三時間ほどと云ふものは何處をどう歩いて来たやら勘しも判らない。私はこんなことで幾日過つたら覚えられるのであらうと思つて心細かつた。殊に見習ひうちは一文も貰へるわけではないから一日も早くおぼえねば大變である。そこで晝間いくたびとなく歩いて見て、見習ひ出した三日目の朝から一人で配達をした。つまり二日間朝晩都合四回だけで覚えて仕舞つたのであつた。大ていの



者は五日ぐらゐ掛るのであるから、致へる人もびつくりしてゐた。いよく巡路帳を便りにして出て見ると、晝間歩いた時には十分自信があつたのであつたが、暗いのと、寒いので巡路帳が持つてゐられないのと、其處へ大きな籠へ、やまと、國民、日本、朝日、憲政、時事、中外、萬朝、讀賣、中央、日々、報知、毎日、二六、都の十五新聞を約四百枚近く入れて居るのであるから、掛けた肩が潰れるほど痛くて重くて、半ば頃まではろく／＼歩くことも出来なかつた。配達し了つたのは朝五時過ぎから始めたのに、お晝を過ぎてゐた。其の上何處で間違つたのか、十五枚ほど新聞が餘つてゐる、さぞ叱られることだらうと思つて、戻ると、夫れは誰れでも最初あることだと云はれてほつとした。そんな劔呑な日が二日過つと正月は來た。新年號は各新聞が二倍も三倍もの量になる。私の居た店は配達人が恰度十人居たが、總出で替りがはり本社から新聞を受け取つては車に山と積んで歸つた、夫れやら繪附録やらで、一度には

勿論籠に這入りも持てもしないから、三度に出て、夕刊を配る時刻まで私は朝刊を持つて歩いた。もつとも正月は各新聞とも夕刊は休むので、大して自分には差しさはりにならなかつたが、得意の方では大變怒つてもう止める、とおどしつけられたりした。「紙取り」と云つて本社へ新聞を取りに行くのは正月ばかりではなかつた。一週間に一度は夜の十二時々分からゴロ／＼と京橋まで出掛けて行つて各社を廻つて四時頃に店へ歸らなければならぬ義務仕事があつた。配達人はみな一號二號十號と呼ばれるので、私の區域は十號であつた。私は何んだか監獄のやうな氣がせずには居られなかつた。此の十人のうち、夕刊取りと云ふのが二人ある。夫れは一人はやまとと二六(今の世界新聞)とを取りに行き、一人は中央と報知とを取りに行く。夫れから二番と云ふのが一人ある、此れは朝刊の遅れたものばかりを持つて歸るので、夕刊取りは一箇月三圓二番は四圓であつた。夕刊取りと二番とは最も足の早い者でなければ務まるも



のではなかつた。京橋から日本橋を通つて萬世橋を渡つて御成街道を一直線に上野へ出て、車坂町から北清島町までの一里餘を澤山の新聞を積んだ車を輓いて僅か二十分から三十分ぐらゐの間に駆け付けるのであるから並大抵の仕事ではないのである。電車なぞより勿論早かつた。其のかはり此の三人は義務の紙取りの方へは加はらない、夫れで義務の方はつまり七人しか無いのである。私は一月一杯を何とも名状しがたい不安な裡に送つた。夫れは外でもない、誤配と云つてやまと新聞のところへ都新聞を投げ込んだり、未配と云つて字の示すやうに配るのを忘れたりしては、得意先から怒られることである。或る時には二三十枚ほど這入る大きな小路を一つころりと抜からかして弱つたこともあつた。十號と云はれた私の區域は北清島町一部、松山町全部、南松山町一部、浅草本願寺内全部、田島町大半、松葉町半分の五町一門跡に亘て居て店でも廣い部の方であつた。門跡内には澤山大學生が下宿して居た。夫れが學校へ行く

までに間に合はないと喧ましく云ふのが殊に私には辛かつた。けれども一方大てい新聞配達と云ふものは二十才以上の者であるのに、私が十五になつたばかりの身でかうして苦しんで居ると云ふことは非常に同情を引いて、中には菓子を買つたり、蜜柑や餅を殘して取つて置いて呉れた家もあつた。其の間には幾度も雪が降つた。或る夜なぞは運悪く大雪に義務の紙取りが當つて、行きの空車さへ重かつた位だから、戻りには日本橋の上へどうしても上れなくて、巡査に頼んで後を押して貰つたやうな滑稽なる悲惨事もあつた。私は辨當と云ふことに就いても随分弱らせられた。夫れは朝刊をやつと配り完つて腹を減らして歸つて来て見ると辨當が誰れかの爲めに空にされて了つてゐて、朝飯を食へずに済ますことが一週間に二度ぐらゐづゝはあつた。また人間の食物が這入つて居るとは何うしても思はれないほど、ぬる／＼汚れた其の上うるし臭い辨當の箱と云ひ、砂だらけの南京米と云ひ、毎日ろく／＼潰かつてはゐない菜つ葉ば



かりと云ひ、夫れは未だしも、貧に馴れ、食つたり食はなかつたりして一月の  
 餘も永い旅を續けて來た私には辛棒が出來たが、第一に辛かつたのは量の少な  
 いことであつた。人の辨當を盗んで食つたり、一錢でもありさへすれば焼芋や  
 何んかを買つて來て取り合ひをする同僚の淺ましきも、決して無理ではなかつ  
 たのだ。私は買ひ食ひをしやうにも金が無い、辨當は取つて食はれる、尙其の  
 上、濱名湖畔の戀人へ手紙を出す爲め時々辨當を五錢の現金で賣つたりした。  
 これで營養不良に陥ち入らなかつたら餘程どうかしてゐるのである。私はだ  
 ん／＼瘦せ、だん／＼髪の毛が赤ちやけて行つた。二月に這入つてからは餘程  
 配達にも馴れたので、中央と報知の夕刊取りを志望して引受けた。此の自分か  
 ら私は自分で自分を激しく責め出した。  
 自分は何の爲めに東京へ來たのだ、立派な畫の先生に就いて勉強する心算で  
 はないか、夫れなのに、夫れなのに、東京へ來てからもう一月の餘になる夫れ

だのに、自分は何一つとして得たことはないではないか。中京の空から偲んだ  
 時には、新聞配達と云ふものは、皆苦學生だと思つてゐたのが、これはまた、  
 皆墮落の骨頂者ばかりではないか、人のものを平氣で盗む、得意先の女中や令  
 嬢の話を何より楽しさうにして、笑ひ轉げてゐる。夕刊を配達して歸ると、夫  
 れぞれ、怪しげな水を顔へ塗つて、一枚もの、著物を著て、淺草へ出掛ける。  
 銘酒店の淫賣婦を冷やかに行くのだ。こんな空氣の中で自分はまア何と云ふ  
 ぼんやりした一月と云ふ日を過して了つたことだらう、今に自分もかうしてゐ  
 ると彼のやうになつて了ふのだ。自分はならない心算でも、白い布も墨が飛べば直  
 ぐ汚れる、ことに人間には誘惑されると云ふ弱味があるのだ、自分は今一步で  
 其のアトモスフェニーに陥ち込むべき斷崖に立つてゐるのではないか、夫れを  
 今日まで唯だ呆然としてゐたとは、我れ乍ら何と云ふ愚劣な人間だらう、早く  
 遁れ出でなければならぬ、一日も一刻も早く逃げ出さなければならぬ。自



分の爲めに、自分の前途の爲めに。

けれども逃げ出すべく餘りに私は其の日々々に追はれてゐた。第一逃げ出すべくも著て行く著物が無かつた。配達に出たまゝの姿で、一枚の貸し蒲團に餅になつて寝る。著物のあるものでも、寝巻を持つてゐるやうな者はないから矢張り絆布のまゝで寝る、彼れ等に取つて一枚の著物は唯一の悦樂境たる十二階下を彷徨よふべき唯一の伊達著であつたからだ。ろくろ掃除もしない一室でさうして、皆が寝るのであるから、風がうじくするほど誰れの蒲團にも誰れの絆布の絆筋にもぞろくと居た。私は何よりこの風に苦しめられた。其處でこの生き地獄を通れ出づるには先づ著物がなければ不可ぬと考へたから、金三圓の収入を得んが爲めに、夕刊取りを引き受けたのであつた。

## 十八 夜泣きうどん屋と夕刊賣り

私の新聞の得意先の内に望月金鳳同青鳳の兩畫伯があつた。家は金鳳氏は菊屋橋の角、青鳳氏は其の裏手のところの本願寺境内であつた。私は夕刊取りをして其の月の末には古著なれど著物と羽織が出来の見込みがついたので、二月の中ばごろであつた、兩氏を絆布姿で訪うて、百方入門を乞ふたが不可能に了つた。新聞配達は夫れほど世間から見込みが悪いのだ。私は悶々の日を送つた。同じ月の末近く下谷區上根岸の奥に尾竹國觀氏を尋ねて行つたが、留守で逢つては頂けなかつた。それで私も暫らくは生き地獄で自重して止まることにした。辨當代の残りの月給は小使ひにして、三圓の夕刊取り料で著物を買はうと思つて外へ出たが、本屋の前へ立つて我れを忘れて夫れですつかり本を買つて了つた。四冊であつたが皆修養論のものであつた。三月からは朝の二番の紙取りをも引き受けた。これで其の月の末には七圓と云ふ月給意外の豫算が立つた、夫れで著物も買った羽織も買った、本も買った。國の妹へ幼年雜誌も送つた。七



圓あれば夜學へ立派に這入れたのであつたが、私は畫家志望であつたのと、一つは獨學と云ふものゝ權威を自覺し出したので、進んで通ひはしなかつたのであつた。第一暇も許さなかつた、夜は十二時に起きて朝刊取りに出掛けねばならぬ。紙を取つて歸ると先づ五時だ、夫れを折つて配達して來ると何れほど急いでも八時である。人間は寝ると云ふ病氣があるから夫れから晝までは寝なければならぬ。起きれば直ぐ夕刊取りに出掛ける、夕刊を持ち込んで矢張り折つて配りに出ると、戻るのには夜の八時だ、夫れからは夜學へ間に合はない、そして十二時にはまた朝刊取りに行くのであるから、一時間でも寝なければならぬ。此んな中からどうして學校へなぞ行つて居られやうぞ、私は悲しいかな今の新聞配達は先づ九分九厘まで墮落生であると云ふことを告白すると同時にまた何れほど偉い青年にしても、紙取りを朝晩しては通學は出來ず、夫れかと云つて夫れを何ちらか片方だけでも止めれば、月謝や本代が出ないから、新聞

配達だけで學校へ通ふなどは断じて出來ないことをこゝに明言しなければならぬ。また紙取りを朝晩してゐると、寝る時間と云ふものは四時間か五時間足らずであるから、其の眠いこと、私は、配達だけは居眠りは出來ないが、空車を輓いて本社へ出掛ける時には、夕刊の時も朝刊の時も居眠つて歩いたのであつた。其れで或る時には、電車に打つ付かつた、或る時には馬車馬の顔へ自分の顔を付き當て、びつくりした。或る晩などは、日本橋通りの風月堂の前に置いてあつた箱車に打つ付かつて、自分の挽いた車に兩手の指を挟まれて、中指と人差し指を兩方ともぐづぐづに潰して一箇月も痛さに苦しんだ。眠さは暖かくなるほど激しくなつた。初夏のころだ、私は續けたかつたのであつたが、誰れしも小使ひ錢に困るので、朝夕とも紙取りを同僚に譲らなければならなかつた。忽ち私は本代を他に求めなければならなかつた。其處で内職として夜泣きうごん屋をはじめた、淺草紙を卸しやから仕入れて賣つて歩いた、あまごけ



屋をした、天狗まんぢゅう屋をした、夕刊賣りも雷門のところまで二月ほどした。此の中で、私をして一番思ひ出を持たしめたものは、夜泣きうどん屋であつた。

休み々々ではあつたけれど、兎に角に七月から其の年の十二月までと云ふもの、間してゐたのであつたからいろいろな物語りを作つた。私は人が悪いやうではあつたが、こんなことを考へて賣れ高を多くするのに努めたこともあつた。夫れは同業者の通つた後を歩くほど腹の立つほど賣れぬことはまたとない。其處で、客に呼び止められると、其の儘車を止めずに必らずぐりと反對の方へ梶棒を向けて置く、すると前の方なぞから來た同業者は、私の車が自分の行く方へ向いてゐるものであるから、追ひ付いたのだと思つて喜んで追ひ起したつもりで、其の實は私の通つて來た後へ行く、私はさうしては好いところを選つて歩いたものであつた、さうでないといふ、自分がこれから行かうと思つて居たところ

へ一つ賣つて居た爲めに先廻りをされてはつまらないからである。同じ下谷淺草合同店の西部の配達人に山田と云ふ男があつた、これが矢張り夜泣きうどんを暫らくしてゐた。山田君とは紙取りに行つた先で始終逢つたのでよく知り合つてゐた時々此の二人の新聞配達兼夜泣きうどん屋は十一月頃、四つ辻などで行き合つた。

「おい」と私が云ふと。

「おい」と同じやうな返事をする。

「出るかい」と私はいつも先づかう聞いてやる、出るかいとは賣れるかいの意味であつた。

「あかん」と山田君はきまつたやうに斯う云つた。其の實彼れも中々宜く賣つた男なのである。

「一つ食はうか、寒いぢやないか」



「よからう」二人は自分の作つたうどんをよく立つて、音をさせて食つたもの  
 だ、夜はすつかり更けて了つて遠くで支那そば賣りのチャラメルの音がする、  
 私はしんみりと人生を考へさせられずにはゐられなかつた。

夜泣きうどんは中々儲かつた、都合が好いと一晩に三十銭ぐらゐ純益があつ  
 た。この時分の私にとつて一晩に三十銭は頗る大金であつたのだ。夜泣きうど  
 ん屋をするには勢しも金はかゝらない、うどんの玉から汁から井から何から  
 何までの道具一さい附いた屋臺車を貸すところが市内に何十軒とある。其處へ  
 行つて四圓だけ車の保證金として收めれば直ぐに出来るのだ、そして一晩に十  
 五銭宛車から道具や何かの損料を拂つて、汁や玉や炭などは大抵元價と云ふも  
 のが知れてゐるから、夫れに依つて賣れたいけづ、拂つて居れば宜いのである  
 もつとも貸す方では十五銭の損料の外は勢しも儲けないうやうに見せてゐるが、  
 矢張り夫れやこれやで一すづゝにもせよ頭をはるからうどん玉はそば屋で仕入

れ、炭は別に自分で買ひ、汁は料理屋に亘りを付けて置いて餘りを買ひに行け  
 ば一層徳である。汁を料理屋の餘りものですると云ふことは一寸聴き大變悪ご  
 すいことのやうに聞えるが、いづれ貸して呉れるところでもさうして居るので  
 あるからどちらにしても同じ譯なのである。夜泣きうどん屋が自分のところで  
 新らしく汁を拵らへるなぞと云ふことは先づ無いのである、また知らずに素人  
 がさうしてゐても結局夫れでは儲からないから、止めるか、例の料理屋へ出掛  
 け出す外はないのである。また損料の十五銭も十銭までは大丈夫負けて呉れる  
 こともこゝに付け加へたい。

淺草紙賣り、あまざけ屋、天狗まんぢやう屋、夕刊賣り、この四つはどれも  
 餘り骨の折れるだけの儲けが酬はれるものではなかつた。唯だ淺草紙賣りだけ  
 は、新聞の得意で一寸々々買つて呉れて相當のことはあつた。淺草紙賣りをす  
 るには、一文も資本金は要らない、卸屋で車も品物も保證金無しで貸して呉れ



るから夫れを鞆ひいて歩いて、各戸かくこに亘わたつて訪問ほうもんするのである。あまざけ屋も天狗まんぢゆう屋も、資本しほんの要いらないこと、製造元せいぞうもとから道具だうぐ一さい借りるのは淺草紙賣あさくさかみうりりと少しも違ちがひはないが、是この二つは車くるまで無なくて荷につて歩くのである。夕刊賣ゆふかんうりりは本社ほんしやへ出掛でかけて行いつて欲ほしいだけ現金げんきんで買かつて來きて賣うるだけのことで誰だれにも判わかり切きつたことであるのは勿論もちろんである。斯かうしたあはたいしいうちに生き地獄いきじごくに於おける私の生活わたくしのせいかつは滿一年まんいちねんを過すして、十六の春はるを迎むかへることになつた。畫家がくがは随分考かんがへてゐては訪とうて、書生しよせいに於おいて呉くれと頼たのんだのであつたが、何なにの家うちも著きるのや下駄ひたは自分持じぶんもちで、また通かようには月謝げつしゃのたかいこと、とても私わたしには出で來きない相談さうだんであつた。私わたしは何事なにごとにしても先立さきだつ金かねが無なくては、何なんにもならないものだと思おもはせられた。

## 十九 にせ車夫くるまふとにせ廢兵はいへい

十六の春はる二月にがつのことだ。私わたしは近所きんじよの車夫くるまふと知り合あひになつて、夜中よなかなど、其その車夫くるまふが休やすんでゐる時ときを目めがけては、借かり出だして行いつて上野うへののところところで半月はんつきほど客待きやくまちちをやつた。鑑札かんさつを調しらべられた時には、人ひとは違ちがつてゐても、車夫くるまふのあつたから夫それで甘あまく濟すんだ。けれども斯これは余あまり賃金ちんきんを得うることは出で來きなかつた。一ばん多おほかつた時ときで二十錢にじふせんそここゝであつた。

生き地獄いきじごく、新聞配達しんぶんはいだつの足あしをいよよく洗あふことが出で來きたのは、其その年としの陽春やうしん四月ごがつ半なかばのことである。世間せけんは醉まふた醉まふたの歡樂時代くわんらくじだいであつたが、私わたしの身みの上うへは矢張やばり冬ふゆであつた。若わかき命いのちの過すぎぬ間に、樂たのしい春はるは老おいやすいのに何處どこまで不ふ幸さいなやうに作つくられた運命うんめいではあつたことだらう。私わたしはにせ廢兵はいへいになつたのであつた。蜻蛉とんぼや飛とび直なしては元もとの枝えだ、とは誰たれが云いつた、私わたしが新聞配達しんぶんはいだつからにせ廢兵はいへいに遷うつつたのは、生き地獄いきじごくから矢張やばり生き地獄いきじごくへ遷うつつたのであつた。私わたしは何處どこまでも呪のろはれてゐたのであつた。



これも新聞の得意先であつた、淺草區田島町二十一番地帝國博愛團淺草支部である。博愛團ではやまと新聞を取つてゐた、朝刊の時は寝てゐたが、夕刊を配つて行つた時には、私は其の表に出してある麥湯を大きな湯呑みで御馳走になるのを毎日の何よりの楽しみにしてゐた、「ありがたう」と一寸家の中へ頭を下げて來い々々するうちに其處の主人公と親しくなつた。これが誘惑される第一歩だつたのであつた。

「新聞屋さん、勉強が出来ますか」

「え、駄目です」

「へえ、月給は一體いくらですね」

「八圓」

「新聞の得意が殖へれば褒美があるんでせう」

「はあ、一軒に五錢宛ですが、一方で殖へても一方で減りますから、勧誘料は

極められてありまして無いのと同じです」

「夫れでは食べるだけです」

「食べるだけでもありやしません、ですからいろいろ内職します」

「冬も辛いやうですが、また是れから暑くなると、随分大變らしいですね」

「實際夏の方がえらいです、殊に水が出た時なんぞ、私等は惨めなものですよ、腰まである中を、足さぐりですから、命懸けです。炎天は炎天で身体がとろけて仕舞ふやうだし」

「君どうです、一つ俺んとこへ來て藥を賣つて見たら」

「……………」

「一寸も骨の折れることはないし、十錢のものを賣りや四錢は君の純益になるわけで、馴れた人は一日に十圓も賣るが、一圓づゝ賣つても新聞を配つてるより好いですが、そして儲けさへすりや一日や二日休まうと休むまいと自分の



勝手です。勉強なんかいくらでも出来る、此れから夏へ向つて来ると汗知らずや仁丹がどん／＼売れますがどうです、二十五錢で鑑札さへ貰へば外には一寸も資本なんか要らない。どんな始めてのものでも月に二十五圓や三十圓にはなります」

「……………」

「え、さうしなさいな、俺も君はずつと前から末だ十五六らしいが可哀さうにと思つてたんですから、十分便利のやうにもして上げますよ」

「さうですな、けつかうです」仁丹の一言がひどく私を動かした。さう云ふ品物を持つて歩いてるのなら、此の家はなか／＼固い家だな、と思ひ込んだのであつた。斯んな二口三口で例の麥湯を呑み乍ら、私と店先の主人公との間には話が成立したのである。

さて賣りに出ることになつて見ると驚いた、もつとも朝晩毎日表を通つてゐ

たのであつたから、カーキ色の古手の軍服のやうなものを著て賣り歩くんだなと云ふことは知つてゐたが、私はこんな子供の事だから勿論著物で宜いのだと思つてゐた。そして學校通ひのやうなツツク靴か何んぞへ薬を入れて行く心算で居たのであつた。總ては意外であつた。私も矢張り軍服を著て怪しげな勳章まで下げて、黒い靴形の函をぶら下げて出なければならぬと云ふのだ、云ふ迄もなくにせ癩兵である。夫れにしても十六の少年が癩兵とはにせ物にしてと餘りに淺ましいではないか、兎に角服を著けて見ると私は脊が高い方なので大人のがしつくりと身に合ふ。グートルを巻いて、靴が無いのでゴム足袋を履き帝國博愛團と書いた帽子を冠ると、これで癩兵團の一人である。私は五十位の立派な口髯の生へた男の尻に附いて實地見習ひに出た。二人は御徒士町の裏通りから初めた。

「え、私は帝國博愛團から派遣されましたものでございますが、仁丹はみが



き救命丸按摩膏か何かを御買ひ求めありまして御同情を願ひます』と口髯が云ふと、勤め人の奥さんらしいのであつたが、

『では仁丹を一袋十銭の』

『はい有難う御座います』と先生が靴から出したのは、

『麒麟』と云ふ青い袋の丸薬である。

『おやこれは仁丹ぢやないのですわね』

『え、仁丹より上等なので御座いますが、粒は同じです』奥さんも驚いたらしいが、第一賣り手の一人の私も妙なからず呆れた。家を出る時に主人公が出て呉れた私の分にも仁丹が無かつたので、切れて居るのかな、と思つてゐたが實は『麒麟』を仁丹だと云つて賣るのであつた。

第一日は私は四十銭しか賣れなかつた。桃の叩き賣りまで遣つて來た私も、一軒一軒訪問して品物を賣り歩くと云ふことは大變後めたいやうな氣がして、

どうにも口髯先生のやうにすらくとは出なかつた。夫れでも二日目には七十何銭、三日目には一圓十五銭と云ふ賣り上げがあつた。おもに商賣屋は相手になつて呉れないから、しもたや許りを覗つて乗り込むのであつた。私は新聞の得意でも一通りたへと齒磨一つにもせよ買つて貰つたので、最初一箇月ほどは平均一日一圓以上は天氣が好くて外へ出さへすれば賣り揚げた。好きな本も買へた、希望の上野の圖書館へも自由に通へる。私はこゝも新聞配達と同じく生き地獄の生活だと自覺はし乍ら夫れが爲めについて腰が落ち付いた。所謂廢兵は皆で六人であつた。中島と云ふ六十近いお爺さんを除けては皆毎夜のやうに泊つて來る。私はぞつとおびへた。もつとも寝るのは皆が二階のたい廣い間で寝ることにはなつてゐたが。三度の食事は思ひ々々近所のめし屋で濟ますことになつてゐた。何にしても私にはさうでないものを仁丹と云つたり、廢兵でございませぬと判り切つた嘘はどうにも出なかつた。夫れでありのまゝの



ことを云つては賣つて歩いたのである。青葉若葉の五月末のことである。私は中島爺さんと二人連れではじめて郡部へ出た、夫れは砂の白い玉川であつた。

## 二十 一生の恨み眉間の刀痕

成績が好かつたのでこの日は玉川で泊つて明日もう一日近村を歩かうと云ふことになつた。宿屋は小島屋と云つた。この宵のことである。真に一生の恨み昔ならば身体髪膚武士の生面を……と云はねばならぬ。眉間を赤心會と云ふ同業の、矢張りにはせ廢兵の一人の爲めに斬り付けられたのである。中島爺さんも私も一風呂浴びて、夕飯を待つ間に二階で、一日の賣り揚げ高を勘定してゐると、

「お邪魔します」と這入つて来たのは中の一人は片足の無い、三人の男であつた。私等は相宿の心算では無かつたので女中が間違へたのかなと思つてゐると

實はさうではなかつた。三人のうちの大将分らしいでつぶり太つたのが先づ出した名刺を見るとこの三人は赤心會の連中である。中島爺さんも私も同じやうに手札を出して、どうぞ宜しくと云つた。すると三人は頻りに中島爺さんの膝に披げてある賣り上げの締め高のところを覗き込んでゐたが、やがて口を切つた。

「中々好成績ぢやねえ」

「いへどうも」と中島爺さんは頗る頭が低い、私は黙つてゐた。

「お蔭さまで僕等三人は君等のお尻へや々と廻らされてまるきり晝飯も食へない始末だ」……「彼れ等の態度は急に威猛高になつた。

「オイ、人を馬鹿にしやがるな。此方が物を云つてるのに返事をせんとはどうぢや。コラ、貴様達のやうなおいばれや青二才どもに馬鹿にされてる僕等ぢやないわい。え、君方さうぢやないか」と大将分は連れの二人を見返つた。



「まつたく人を踏み付けるにも程がある」と二人は同時に云ふ。中島爺さんはすつかり青くなつた。私は云ふ迄もなくである。けれども一面其の中には云ひ表はし難い憤怒もあつた。夫れは中島爺さんの態度一つで突發もすればまた引つ込みをせねばならぬ。形勢はいよゝゝ怪しくなつた。大將は宿沿衣の袂から軍隊手帳を一冊取り出した。

「貴様等ア之れがあるまい。憚り乍ら僕達三人は旅順から沙河、あの地で奮戦をして僕は胸に鐵砲玉を受ける。殊に君なぞは足まで無くした立派な廢兵だ。嗚う。こら、貴様達のやうなせ廢兵共とは段が違ふわい。この馬鹿野郎、こゝうこゝう畜生」と云ふより先に三人の中の誰れが持つてゐたのか、大將は白鞘の短刀を鞘なり鷲づかみにして、中島爺さんの鼻つ柱をイヤとばかり三四度と云ふもの撲り付けた。其の拍子に鞘が飛んだのに氣が付いてたのか付いては居なかつたのか、返す勢はいで其の刃を私の眉間へ突き刺した。私はばつたり其處

へ仰向け玉を打つた。

たら／＼と血が顔に流れる。「あ痛たツ」と叫ばぬわけには行かなかつた。此の騒ぎに驚いた亭主がばた／＼と上がつて来て、仲へ這入つたので相手も此の上狂暴をする氣も出なかつたか三人とも自分の部屋へ引つ込んだ。兎に角に騒ぎは静まつたが収まらないのは私の胸である。けれども亭主はひたすら此れが表沙汰になつたは第一自分の家が迷惑だと云つて頼むし、中島爺さんは爺さんで、自分も手酷い目にあつて、顔からは矢張り血をにぢませ乍ら、表向きにしたところ何の徳も無いのだからと云ふので、私も辛棒せねばならなかつた。此んな騒ぎのうちに夜が明けて私等は直ぐ市内へ歸つた。玉川の醫者に一寸手當てをして貰つた傷口を改めて樂山堂病院で手術を受けると、實に深き二仙米突強、長さ一寸餘の大傷で眉毛と眉毛との間から頭の毛に達する眞直ぐの刀痕は私の生きる限り一生拭ふ可からざるものとなつた。其の後足掛け四年、傷は



段々細くなり短くなり薄くなつて一寸逢つた人は氣付かない位になつたが、  
嚴冬に向ふと、しみじみと痛むのである。

斯うして萬年筆を走らせ乍らも思ひ出しては撫で、見ると、またとなく悲惨  
であつた十年の苦學生活に於けるいたましい遺品は私をして一しきりづゝ泣か  
しめる。今年十年振りであつた父も乳母も、先づ第一にこの刀痕に眼を止めて  
涙をこぼした。六年振りの母も祖母も兄妹も暗然とした。血なまぐさくも哀れ  
に悲しい事件ではないか。この悲しい事件はあり乍ら勉強が出来ると云ふ一事  
は何よりも私を去り得はざらしめて、とうとうこの生き地獄にまた一年余りを  
送つた。痛みを負ふて玉川から戻つた私は早速事件の明細を主人公に語ると、  
彼れ等三人も云ふ迄もなくにせ癡兵で、片足の無い男などは私の居る博 團で  
は夫れほどのことはしないが、乞食の片輪者を一日の食料を持つ約束で雇ふの  
ださうだ。また軍隊手帳などは友人のを借りて居る事であると云ふ意味のこと

を談して、私を氣の毒がつて呉れた。

### 二十一 文學に耽溺

私の謂ふところ第二の生き地獄、帝國博愛團から暇を取つて、十四の年に上  
京以來、はじめて人間界へ復活したのは、忘れもせぬ十七の夏恰度日本が獨逸  
に宣戰の布告をして、號外賣りの聲が全市に溢れた大正三年八月二十三日の午  
後であつた。私を人間界へ救い出したのは、これも矢つぱり新聞配達をした時  
の得意の一軒で湯本と云ふ人である。湯本氏はちやきくの江戸つ兒だ、私が  
別に頼んだ譯でもないのに、或る日例のやうに軍服を着て表を通ると、わざわ  
ざ呼び止めて、自分の商賣の御得意と小僧さんの間に合ふのを慾しがつて居ら  
れるからと世話されたのが、下谷區上根岸町十九番地のこのみ菴なのであつ  
た。



このみ菴の主人は下谷區の區會にも出て居られた藤澤碩一郎氏である。このみ菴は青紫蘇を粉にしたのと、山椒の實を煮たのが商品であつた。藤澤家は下谷區での名門である。青紫蘇と云ひ煮山椒と云ひ随分賣れ行きはしたが、商賣が眼目の家では斷じてない。碩一郎氏は落合直文や佐々木信綱なぞと同期の大學出身者である。夫人は金粉商として日本一の黒門町鈴木家から嫁られたのである。令嬢が三人あつた。長女の和歌子様は私と同年で其の時分十七、次ぎが悦子様で御二人は跡見女學校へ通つて居られた。其の次ぎの道子様と云ふのは根岸學校生、御三人とも夫人にいしくも似られて美しかつた。私の仕事は品物を瓶へ詰めること、夫れを市内の小賣屋へ箱車で持つて行くこと、夫れから朝晩の店の掃除、これだけであつた。夜はまるで自分の身体である。私は此の時間に名古屋を出で、以來曾て親しまなかつた繪筆を持つことが出来た。某雜誌の口繪に當選したのも其の時分のことである。幸福にも人間界へ復活す

ることが出来た私は、また幸福にも何と云ふ好い主人を持つたことであつたらう。

一方私の讀書力もいよ／＼上へ向つて、修養本と云ふ修養本、文學本と云ふ文學本はもう大方一度は目を通してゐた。藤澤家へ世話になるやうになつてからは、新刊書ばかり覗つて讀んだ。年がまた暮れてからは一層夫れが猛烈になつて、とう／＼自分は書家になるよりは小説家にならうと云ふ考へを起すまでに至つた。月々の三圓の給金はすつから本を買つて讀む。次ぎには夫れで足らなくなつて、彼方の雑誌や此方の新聞の懸賞小説に應じて其の賞金で本を買ふさうした結果の作品が比較的世間に持てたのが一つは希望なり思想なりの轉化の刺戟であつた。よく徹夜しては、其の原稿を書いたものである。大正四年も漸やく春が老いた時のことだ。私は或る夜令嬢のお供をして電氣館でゴゴリの『呪の鬼』を見た。私は此の時始めて活動寫真と云ふものを見た。これだ



けでも生れて今日までの私の月日がものごとろつき出してから如何にあはたゞしかつたと云ふことを物語るに餘りあるではないか。「呪の鬼」全五巻は私に大驚異であつた。主人や令嬢の親切を謝すると同時に、何んでも断片的なものばかりを書いてゐては何んにもならない、大作をしなければと云ふ氣が起きた。其處へ『婦人世界』が一箇年續載と云ふ長篇な歴史小説を八百圓懸賞で募集の發表をした。時期は來た。私は『奉公人』の身分であると云ふことを、目的の前に忘れて了つて、大膽にも應募しやうと決心した。締切りは九月の十日であつた。主人夫妻と令嬢三人も出來るだけの時間と援助を與へて下さつた。私は夜に日を接いで脱稿を急いだ。自然主人側が寄せられる同情以上に、仕事は怠慢になる、我儘にもなつた。其の上青紫蘇や煮山椒の發明者として一世に名を走せられた硯一郎氏の嚴父和平夫妻が、何れも八十幾つと云ふ高齢で一月ほどの間に相前後して亡くなられた時などは、澤山寄つて來た親戚の人々も呆れる

ほど忙がしい中を、矢張り原稿紙と首つ引きで通した。親戚間の非難の聲は極端に私の身に集まつた。夫れを何とか言譯をされる主人なり夫人なり、また夫れを傍はらで聞いて居られる令嬢方もさぞ氣骨を折られたことであつたらうけれど、また私も、如何に増長して居たとて奉公人であると云ふことは忘れない濟まない濟まないとは氣が付き乍ら、其時には原稿も大半出來上つてゐた。締切りは十四五日先に迫まつてゐる。今更らになつて投げ出すのは如何にも惜しかつたので耳を閉いで専心一意創作に熱中したのも自分勝手のやうではあつたが随分と辛かつた。夜更け人はみな寢しづまつた後など、泣き泣きペンを動かすのであつた。徹夜も幾夜となく續いた。私は卒倒しさうになる睡眠不足を自分で足をつねつたり、頬つべたを力まかせに撲つたりしながら防いだものだ。彼の人などは夫れを見て狂人だと云つた。私は十一の年に『子供屋』の店を出して當てた時分から自分は天才だと自惚れてゐる。其の狂人の狂と天才の天を



接ぎ合はして出来たのが狂天と云ふ突飛な別名である。

浩瀚な歴史小説は愈々完成した。併も締切の當日九月十日に實業の日本社へ夫れを渡した時の喜びはどんなであつたことだらう。けれども不幸にして夫れは落選した。しかし、私が後に關西の新聞界を騒がした文章の根本は、一に此の文學耽溺と、歴史小説に苦しんだからの賜物であつた。或る意味に於て藤澤家は私に取つて實に文筆の命の親である。それなのに私が魔がさしてゐたことが、其の文筆の命の親の家を無断で出た。其の成行きは今から思ひ出づるだに悔悟の涙である。私は永い間の睡眠不足と勝手がましい努力とに激しい神經衰弱に陥つた。益々親戚間の否難は募る、其處へ歴史小説を書いてゐて小さい雑誌からあつた賞金収入が無いので、時々讀みたい本は近所の書店から借りてゐた。夫れが積り積つて十圓ほどあつた、其の上給金はいろ／＼な滋養食物を買ふために一ヶ月分と云ふもの先借りがしてある。その他二三のところにも

ちよい／＼借りが出来た。私はどうにも斯うにも動けなくなつた。九月末の或る晩一寸其處までと云つて手ぶらで出たきりとう／＼歸らなかつたのであつた。

## 二十二 村井弦齋氏夫人と狂天法師

濟まない、實に濟まない、嘘は一日も云ふことの出来ない私は、家出すると直ぐに長文の手紙を藤澤家に送つて、悉くを打ち明けて罪を謝すとともに、近くお返しするから、本屋のはどうか御立替へ願いたいと云ふ意味のことを書き添へたのであつた。文筆の命の恩人藤澤家を出た私は、上田と云ふ一人の友人の下へ走つた。夫れは新聞配達を一緒にした男であつたが、其の當時は家が好くなつて日比谷の海城中學へ通つてゐた。其の友達は僧侶であつた。私は神經衰弱を治すには東京を去るのほかはないと考へ、夫れには汽車賃は例に依つて



少しも持つて居らぬから、衣を貰つて行脚に出やうとしたのであつた。友達は都合よく家に居た、そして頼むまゝに、浄土宗の衣と笠と夫れの付きもの一切夫れから極く初步の御經も一冊呉れた。私は友達の家で一夜を明して、秋風白雲を吹く九月二十四日の早朝、住み馴れた都をのがれ出でたのであつた。墨染の衣に、「今日は西あすは東の旅衣いかなり逝く我身なるらん」狂法師」と自分で書いた笠、みな生れてはじめてのものばかりであるが、ことに草鞋が悲しい。品川の町で頭を剃つた。片手に珠數片手には鐵鉢、斯うした姿で當てもなく流轉の旅にのぼるのかと思へば、床屋のタ、キにはろく／＼落ちる自分の髪の毛も變つて行く鏡の中の顔とを見較べては私は泣いたのである。御經は知らないの、勿論託鉢は出来ない、このにせ坊主は東京を出た翌々日平塚海岸松林の中に村井弦齋氏の夫人を訪ねた。夫人は其の前にも一度訪問したことがあつたのである。この日は變つた私の姿に驚かれた。私は何事も赤裸

に夫人の前へ投げ出した。一家が潰れてからのさま／＼な私の苦勞を聞いて下さる夫人の眼には露があつた。夫人は弦齋氏の著はされた、各宗の「會葬者必携」と云ふ手軽な本を十冊ほどづゝ下さつた。賣らうと、また此れを御寺へ上げて泊めて頂かうと遊ばせとおつしやるのである。私は夫れを内懐深く入れて御暇した。夫人は玄關まで送り出されて、御機嫌よろしうと目をしばたゝかれた。私は夫人の御情をいつまでも／＼忘れぬであらう。其の日は國府津で暮れた。恰度十五夜の月夜で、大島の煙りは夜に入つてからも見る事が出来た。私は海邊へ降りて行つた。冴えた月夜を大海は怒る、人間のみごうして靜なることが得られよう。私は寄せては返す波打ち際に立つて笠をかたげて涙を流すのであつた。松風は若き旅僧狂天法師の袖を叩いては過ぎた。



二十三 湖を慕うて

殺人鬼大米龍雲、私の西へ西へ流れる旅は、彼れの爲めに一方ならず苦しめられた。夫れは龍雲のつかまつて間がないので、私は何よりの頼りにして行くべき所の寺々は一方ならず警戒して容易には泊めて呉れなかつたのである。けれども村井弦齋氏夫人から戴いた會葬者必携はそんな時に何よりの力になつた私は其の度に夫人に對して新なる感謝の念を高めるのであつた。

萬里山川 在脚底、私は十四の暮れに苦しんだ跡を尋ねて漂泊した。濱名湖畔へ出ては大鹿氏に逢ひ、死神を偲ぶとともに戀人とのさゝやきも思つた。一冊の皮表紙の手帳は、紀行文に詩に歌に句に日々幾ページを汚して行くのであつた。十月の半ば過ぎには名古屋へ出た。けれど家へも何處へも寄らずに素通りをした。其の時分所々に爆彈の泥棒があつた。恰度御大典當時とて社會主義

者の所爲と云ふので、旅人などは行く先々で調べられた。私は參宮をした。五鈴の水は何時も乍ら清々しかつた。其の歸りに松坂で輕便鐵道の注意書きを見て、『私設鐵道は「汽車に注意せられたし」官設は「汽車に注意すべし」一寸したことであるが面白い』と手帳に書いた。夫れが松坂警察の刑事の目に止まつて、社會主義の一人だらうと云ふのできびしい取調べを受けた。故郷にも乳母にも合ふに忍びなかつた私は、龜山から貴生川と云つて柘植の向ふの江州の入り口まではじめて汽車に乗つた。會葬者必携を賣つた金があつたからである。江州へ這入つたのは、何となく湖が慕はしかつたからであつた。水口の木賃宿でも一夜を明した。栗太郡の山奥へ迷ひ込んで、有名な信樂の其の奥、雲井川の上流岸の弘法堂でも一夜の露をいとつた。其の次の夜は山中の柿の木の下で野宿して、『手甲に熟柿潰えて目覺めけり』と云ふ句などを實驗の上で詠んだ。十一月九日の夕唐橋の上に立つて、石山寺の月を仰いだ。栗津の松並木を



通つて大津へ這入つたのは夜の十時頃であつた。其の夜は關寺の草津屋と云ふ木賃宿で寝た。夜が明けると霧が深くて逢坂山の朝寝姿がまたとない風情である、三井寺へ參つては廣い湖の朝明けを見た。

「春は先づ返り櫻に惚べども比良の暮雪や夏の水いろ」私は斯う口づさんで堪へ難い去り得ざるものをおぼえた。實に此の水郷の春の様子はまだしも櫻の返り花に想像することが出来るが、秋でさへこんなに美しい湖水の水いろの、十分發露される夏はどんなにか詩を生むことかと思はれた。また比良の暮雪も見なかつた。

「八十でまめでころりと逝くごとし、染めおくれたる三井寺の銀杏」他の木に遅れて、それで染め出すと急に散つて了ふ銀杏の葉は、三井寺の佛にも、また東京の空、藤澤家の御隠居が死なれたにも似て淋しく儂なかつた。

「辨慶はごこまで力の無いことか、引き摺り鐘まで圍はれあるは」辨慶鐘を見

に行つた私は、誰れにでも見られること、思つたのがさうではなくて、家に圍つて見料を取つて居るのに、斯う歌つて、俗悪な世間を悲しんだ。けれども一串の辨慶の力餅は頬の飛んで行くほど美味かつた。

「太公望や、琵琶は松さへ及び腰」湖岸へ出ては、斯うした仙境にのびくと釣りを垂れてゐることの出来る人々の身を心から羨やんだ。神經衰弱は五十日に近い旅にすつかり直つてゐる。相當にくたびれもした。私は大津の町で何んな職業でも好い、探して止まりたいと思つたのであつた。まだ堅田の浮御堂も見ない。唐崎の松も矢橋の歸帆も見ない。龍神のロオマンスがあると云ふ竹生鳥も未だである。狂天法師若き旅僧の愛着は其處にもあつた。

## 二十四 十八歳の新聞主筆

十八歳の旅僧は、衣を脱で大津市眞町京津日報の社會部記者となつた。



創刊してから十有七年、地方新聞としては相當な權威がある京津日報の社長は滋賀厚太郎氏であつた。滋賀氏と云へば關西では誰れでも『あゝ彼の人か』と印象のあるほど故川上音次郎など、雄辯を以て鳴り、またスミスを大津の空に飛ばしめて名を揚げたものだ。記者と云ふ職業は始めてでも私は原稿には馴れてゐたので他の記者に負けず直ぐ活躍することが出来た。入社してから五日目からのことである、『縦横無盡ステッキ夜行』と云ふ寄拔な見出しで市中の夜の出来事を細大洩らさず書き立て、十五日間はど續けた。私の此の試みは非常な喝采を博した。數ある記者の中で私は異彩として認められた。次ぎに方角を變へて、代議士縣市郡會議員等の人物月旦を遣つた。ところが此れも亦出色文章の評判を取つて、社内に於ける私の地位と云ふものは定まつたのであつた。こゝに一つ何う云ふ妙な成行きであらう、不圖したことから入社して一月になるかならぬに十八才の私が同紙の主筆に揚げられる騒ぎが起つた。夫れは城水

兼太郎氏と云つて以前東京讀賣新聞の主筆であつた人が、政友會の關係から私の入社當時は燃犀な言論を立て、居た事であつたが、政黨に對する立場の點から社長との間に衝突を生み十二月の中甸と云ふに憤然退社をして仕舞つたのである。城水氏の退社も唐突であつた爲めに後任が極めて無かつた。一新聞として言論を書く主筆が無くては大變である。早速編輯會議を開いて何うしようかと云ふことになつたが、差し當つて人を招聘する心當りもない。其處で社内から選ばうと云ふ問題が持ち上り、恰度私が人氣を取つて居た時であつたので、他に廿五にも卅にもなつた記者もあるのに愈々一箇月前までは一箇の旅僧であつた狂天が主筆席を占めることになつた。尤も私も指名をされて尻込みをするやうな人間ではなかつたので頗る大膽に引受けたのである。ところが前に苦しいことには前の主筆がなかく凡才ではないから、うか／＼してゐると京津は社説が不味くなつたと云はれなければならぬ。私は揮身の努力を發揮したのであ



る。此の時私はしみる、學問と云ふものは何でも如でも一通りは嚙つて置かなければならぬものだと思つた。にせ癡兵時代に上野の圖書館で一寸目を通して置いた『六法全書』以下の法律本及び政治經濟書は何より加力になつたのであつた。私は此の主筆時代に、第一面を書く外小説も書いた。事實小説『若き母』などは注目されたものであつた。また大正五年の新年號の附録に目出度さに因んで書いた『小説家の出世作』も馬鹿に出来ない感動を殊に京都方面の讀者に與へた。多年文學に耽溺して居たお蔭で大抵文士の出世作は知つてゐたのである。私は其の中で憧憬した人々二三を次ぎに掲げて見度い。

最も力を入れて論じたのは島崎藤村氏であつた。藤村氏は『藤村集』を公にしてから全く詩壇を遠ざかつた。そして明治三十八年に果然『水彩畫家』津輕海峡』などの二三篇を提げて小説界に活路を見出した、けれども夫れ等は一般の好奇心を惹いたに止まつた。出世作は實に氏が逆境の中を淺間山麓から持

つて歸つた『破戒』でなければならぬ。其の時分藤村氏は信州の山奥で教師をして居たので、遂に『破戒』の高原的空氣を背景にした作に筆を下すやうになつたのであつた。作の前半は淺間の麓で成り、後半は東京に引移つてから『芽生』の中に詳しいやうな大きな犠牲を拂つて書き上げたのであつた。信州のローカルカラーを遺憾なく描寫した『破戒』のうちには教育も識見もある。一種の社會主義的な思想を持つて社會の壓迫と戦つてゐる穢多の一人が。親から云はれてゐた『穢多の子と稱する勿れ』の言葉を破つて了ふ悲涼な心的變化が胸苦しいくらい繊細に描き出されてゐる。『破戒』の名のあるところである。眞に新文藝の代表的作品であつた。綠蔭叢書の第一編と云ふ名で上田屋から出版されたのであるが、當時の文壇を戦かして氏は一躍寵兒になつたのであつた。

夏目漱石氏は猫であること勿論である。漱石氏は英國へ行つてゐる時に『カーライル博物館』や『ロンドン塔』などを帝國文學に書いたが餘り名は認められ



なかつた。歸朝してから帝大教授をする傍はらに『我輩は猫である』をホト、ギスへ二回は先づ出した。ところが其の一種洒脱で輕快な筆は批評界世評ともに人氣で、ホト、ギスの編輯者からもつと書いて呉れと云はれて、縦横自在に書いたのが積つて上中下の三卷になり、一足飛びで文壇の王様に上げられ、濟ましたのであつた。『時機が來てゐたんです』と自身も云ふように、藪から棒のやうに流行兒になつた氏は、其の後帝大を退いて東京朝日新聞へ年俸三千元で招かれ、此の頃は『明暗』でまたく新聞の配達を讀者をして待たしめてゐる。

私は近代思想にかつれた評家や作家からは捨てられてゐるが、村上浪六氏が今だに好きである。京津紙上でも氏に就いて説くに、私は紙面を惜しまず明細であつた。

浪六氏は艶麗花のやうな紅葉や美妙の全盛時分に、突如『三日月』の所詮鬢

撥小説で一世を騒がしたのであつた。氏が『三日月』を書いたのは報知新聞の校正の時に其の頃の小説がみんな戀愛めいたものばかりであつたので、其の反抗的對度で一脈の活氣を添へる可く努力したのであつた。浪六氏は『學校を卒業ての人々にどうして世態人情の機微が解るもんですか』と其雜誌で現代の文壇を罵倒した。氏は實に小説家としては異分子である。此の小説には空想が多い。そして奇構で變化があるのは氏が旅行好きで汽車の中で鉛筆で書いたり、旅装を調べて忙はしがり筆を執つたりするからである。氏は文章に少しも苦心をしたり、また凝りもしない。以前は玄軒居士と號を付けてゐたが其の時代に書いた『金の旅行』なども浪六式のものであつた。

## 二十五 近江八景の春

永い旅を行き暮れて宿とした近江の私の生活は、實に得意なものであつた。